

万葉時代のグリーンケミストリー2

—万葉時代の生薬について—

杉山一男^{†1}

Green Chemistry in the Manyo Era 2: —Herbal Medicines in the Manyo Era—

Kazuo Sugiyama^{†1}

Herbal medicine refers to any medicinal therapy that employs medicinal leaves, roots, or barks without extracting their active ingredients. Although native herbal medicines are believed to have been used in ancient Japan, the most advanced information on the use of herbal medicine in China reached Japan in the 5th century through the Korean peninsula. Furthermore, although herbal medicines are sometimes used alone, they are usually mixed together and utilized as a prescribed treatment, i.e., a traditional Chinese herbal remedy. Approximately one-third of the Man'yōshū poems, i.e., about 1500, mention plants and almost all of them are used as food, clothing, dyes, and herbal medicines. In this paper, we attempt to provide some insights into both the outlook on the nature and lifestyles of the people in the Manyō era, based on their views and considerations of plants, as well as an overview of the state of ancient medicine. Specifically, the Man'yōshū poems in which plants were mentioned as useful herbal medicines were selected. In addition, the inherent active ingredients, pharmaceutical effect, and the traditional Chinese prescriptions for each plant were studied.

^{†1} 近畿大学名誉教授

Professor Emeritus at Kindai University

1. はじめに

ヒトは長い歴史の中で、多くの草根木皮を始め、ある種の動物や鉱物を摂取したとき、偶然の治癒経験から様々な疾病を治すための薬を見出し、その知識を蓄積してきた。これら天然に存在する薬効をもつ産物から有効成分を単離・精製することなく簡単な加工を施して薬用としたものの総称を生薬という。第十五改正日本薬局方では、「生薬は、動植物の薬用とする部分、細胞内容物、分泌物、抽出物または鉱物など」と定義されている。

メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・黄河文明などが生まれた地域には、それぞれ知恵や経験によって選り抜かれた特徴的な生薬があり、独自の医術が発達した。現在の西洋医学はヨーロッパ各地の伝統（民族）医学が融合・発展したものであり、具体的にはギリシャ・ローマの医学がアラビア医学を経て、継承されたものである¹⁾。

中国商代の甲骨文には、医・薬の文字は見当たらないことから、病気治療には経験的に見出した多くの生薬が用いられていたであろうが呪術師の役割が主流であったと考えられる。医学と宗教の区別のない時代を経て春秋戦国時代までに蓄積された膨大な医薬に関する知識は、漢代に三大古典といわれる「黄帝内経」、こうていだいけい「神農本草経」、しんのうほんぞうけい「傷寒雑病論」として集大成されており、記載される基本概念は今日の日本の漢方医薬学に引き継がれている²⁾。「黄帝内経」は鍼灸家の古典的な經典で「聖人は既病を治すのではなく、未病を治す」とある。「神農本草経」は薬物を上品・中品・下品に分類している。じょうほん「傷寒論」は、急性熱性病を扱う「傷寒論」と慢性病を扱う「金匱要略」に分けられ、前者には、葛根湯・芍薬甘草湯など、後者には桂枝茯苓丸・八味地黄丸など多くの漢方処方が記載されている³⁾。我が国においても独自の生薬があったと考えられるが、中国の医薬に関する知識は5世紀中頃、朝鮮半島を経て伝来したことが古事記⁴⁾の允恭天皇の条から知れる。

一方、万葉集⁵⁾に集録された歌4,516首の約1/3にあたる1,500首余りの歌に植物が詠み込まれている。その植物の多くは、生薬のほか食糧・衣料・染料などとして用いられる。本報では、万葉時代のグリーンケミストリーの観点⁶⁾から、古代の日本の医薬の在り方を概観するとともに万葉集に採録された歌の中から生薬となる植物を織り込んだ歌に注目した。そして、万葉人が抱くそれぞれの

草花に対する思いから彼らの自然観や生活の有り様を味わうとともに、生薬としての薬効について述べる。

2. 万葉時代の医薬

2.1 正倉院の「種々薬帳」以前

薬草についてのわが国で最も古い記録は古事記にある因幡の白（素）兔の記述であろう。古事記の「上つ巻の大国主神の条」には次のように記されている。

兔が「わにに吾と汝と競べて族の多さ少なさを計らんと欲ふ」と欺いて、わにを並べさせ、数えながら淤岐島から渡ってきて、気多の前に至る直前に、「汝は、我に欺かえぬ」といったところ、最後に臥せて並んでいたわにによって「我を捕へて悉く我が衣服を剥ぎき」と裸にされていた。伏せっている裸の兔に出くわした大国主神の兄弟の神々たちに、「海塩を浴み、風に当りて伏せれ」と言われたのでその通りにしていた。素兔は「教の如く為しかば、我が身、悉く傷れぬ」状態となった。そこに大国主神がやってきて、「水を以て汝が膚を洗ひて、蒲黄を取り、敷き散らして其の上に輾転ばば、汝が身、本の膚の如く必ず差えむ」と教えた。蒲の花粉は生薬・蒲黄として「神農本草経」に記載されている止血薬・傷薬である⁷⁾。

また、古事記の「中つ巻の允恭天皇の条」に新羅から漢方が伝えられたとする記述がある。仁徳天皇（第16代、在位：5世紀前半）の第四皇子であった允恭天皇（第19代、在位：5世紀中頃）は皇位継承のとき、「我は、一つの長き病有り、日継を知らずこと得じ」と言って辞退したが、太后や周りの諸の卿等に推されて即位した。この時、新羅の国王が貢物を献上した。「爾くして、御調の大使、名は金波鎮漢紀武と云ふ、此の人、深く薬方を知れり。故、帝皇の御病を治め差しき。」とあり、新羅の医師が生薬の処方をよく知っていて天皇の病を治療している。天皇の病気の治療は新羅の医師に頼っていたのである。

一方、日本書紀⁸⁾の「欽明天皇の条」には百済から医師・採薬師の来朝が記されている。欽明天皇（第29代、在位：539?～571年?）十三年冬十月の条に、百済の聖明王が釈迦仏の金銅像一躯・幡蓋若干・経論若干巻を天皇に献上し、十四年六月には、天皇は「医博士・易博士・暦博士等、番に依りて上き下れ。…また、卜書・暦本・種々の薬物、付送れ」と勅命を発し、それに応じて百済は、

欽明十五年二月に、医博士・易博士・暦博士・^{さいやくし}採薬師らを送り込んでいる。

推古天皇（第33代、在位：592～628年）十五年（607年）、小野妹子が遣隋使として隋に渡ったとき、^{くすし えにち}薬師恵日も随行している。小野妹子は翌年帰国しているが、恵日は推古三十一年（623年）まで滞在している。日本書紀の推古三十一年七月の条に、「三十一年の秋七月・・・^こ是の時に、^{もろこし}大唐の^{ものならひひと}学問者の^{ほふし}僧^{あき}惠^{さい}齊・^{あきわう}惠光と^{くすし}医^{えにち}惠日・^{ふくいん}福因等、並に^{ちせん}智洗^に爾等とに^{したが}従ひて^{まふけ}来り。是に^{ここ}恵日等、共に^{まを}奏聞して日さく、『^{もろこし}唐国に^{とどま}留れる^{ものならひひと}学者、皆^{げふ}学びて^め業を成せり。喚すべし。且^{また}其の^{もろこし}大唐国は、^く法式^{そなは}備り、^{めづらしき}定れる^{かよ}珍国なり。常に^ま達ふべし』とまをす。」とある。恵日は、更に、舒明天皇（第34代、在位 629～641年）二年（630年）の第1回の遣唐使にも随行して唐に渡り、白雉五年（654年）にも遣唐副使として3度目の入唐をした。彼は隋の医書「^{しよびょうげんこうろん}諸病原候論」や唐の医書「^{せんきんほう}千金方」を持ち帰ったので、朝鮮半島を経由せず、直接、中国の医学・薬学が列島に伝わった。

持統八年（694年）、持統天皇（第41代、在位：690～697年）は藤原京に遷都しているが、この藤原宮跡から出土した木簡に「本草集注上巻」と記されたものが見つかっている。このことから我が国では薬物の教科書として、陶弘景が中国最古の薬物書である「神農本草經」を校訂し、さらに注釈を加えた7巻からなる「神農本草經集注（集注本草）」が使われていたと考えられる⁹⁾。文武天皇の大宝元年（701年）に施行された大宝律令および、孝謙天皇の天平宝字元年（757年）に施行された養老律令中の「^{りやう}医疾令」は我国の医療制度上画期的な医学・薬学の教育と臨床活動をする機関を定めた法令である¹⁰⁾。教育は大学と国学に分かれ、大学は総合大学であり、国学は国ごとに置かれた。大学では^{いしやう}医生・^{あんまのしやう}針生・^{じゆごんしやう}按摩生・^{にやうい}呪禁生・^{やくおんのしやう}女医・^{かよ}薬園生に分かれてそれぞれの知識を習得した。

2.2 正倉院「種々薬物」

2.2.1 聖武天皇と光明皇后

聖武天皇（第45代、在位 724～749年）の名は^{おびと}首。首皇子は和銅七年（714年）皇太子となり、^{れいき}霊龜二年（716年）、藤原不比等の娘・^{あすかへひめ}安宿媛（通称：光明子で後の光明皇后。母は^{あがたのいぬかいのたちばなの}県犬養橘美千代）を妃として迎え、2年後、阿部内親王（後の孝謙天皇）が生まれている。神龜元年（724年）、首皇子は24歳で即位した。なお、神龜五年（728年）、聖武天皇と非藤原系の^{じんき}県犬養広刀自の

間に^{あきか}安積親王が生まれ、皇太子の最有力候補であったが天平十六年（744年）、17歳で急死している。

皇后となった光明子は天平二年（730年）、皇后宮職に「施薬院」と「悲田院」を設けた。施薬院は皇后宮職と藤原氏の封戸^{ふに}（律令制度における俸禄制度の一つ。皇族や貴族などに階位・官職・勲功に応じて支給された公民の戸）の庸物を財源に全国から薬草を買い集め、疫病に苦しむ人民の救済を目的とした仏教の慈悲の心に基づく施設である。貧者・病人・孤児に施しをする悲田院には「千人洗垢」の伝説があるが実態は分かっていない。

伝説¹⁾によると、「皇后が、仏の啓示によって浴室を建て、千人の垢すりをすると請願して、乞食や病人を招き昼夜熱心に勤めた。最後の千人目に、見るからにひどい患者が来て、異様な臭気を浴室に満たした。皇后は意を決して背中垢を摺ることになり、終わると患者は自ら阿閼^{あしやくぶつ}仏の化身であることを明らかにし、浴室は光明と香気に満ち、その姿は消えた。」とある。

聖武天皇は天平十二年（740年）、^{ちんおも}朕意ふ所有^よるに縁^よりて」といって「彷徨五年」といわれる関東行幸をした。天皇40～45歳のことである。彷徨中の天平十三年（741年）に全国に国分寺建立の^{みことのり}詔^{みことのり}を発し、天平十五年（743年）には、総国分寺の東大寺に盧舎那大仏（奈良大仏）建立の詔を発した。東大寺造営工事中の天平二十一年（749年）、陸奥国から金を産出したので聖武はこれを喜び、年号を天平勝宝と改めている。同年、聖武は自らを「三宝の奴」と称して、身勝手にも出家してしまい娘の阿部内親王に譲位して孝謙天皇（第46代、在位：749～758年）が即位した。この頃、聖武上皇は病気がちのうえ、孝謙天皇も東大寺の造営に力を注いでいたので実際の政治は光明皇后と補佐役の彼女の甥の藤原仲麻呂（後の恵美押勝）が天皇の信頼を得て政権を担い主導権を得ていた。

奈良大仏の開眼供養のイベントは天平勝宝四年（752年）盛大に催されている。聖武天皇が唐の高僧鑑真によって東大寺大仏殿の仮の戒壇で正式な受戒を受けたのが天平勝宝六年（754年）、そして2年後の天平勝宝八年（756年）崩御した。ここに、聖武天皇に受戒を与えた鑑真のような宗教指導者は、仏教・仏典についての知識だけでなく医学・薬学の最高の知識も持っていたので、病弱な聖武天皇の侍医を務め、母・藤原宮子（藤原^{ふひと}不比等^{ふひと}の長女）の看病禪師も務めている。

天平勝宝八年（756年）、聖武太上天皇の四十九日（七七忌）に光明皇太后が聖

武遺愛の品々とともに各種の薬物を東大寺盧舎那仏に献納した。それらは、現在、正倉院に宝物として収められている。献納された品々は「国家珍宝帳」と「種々薬帳」の2つの「東大寺献物帳」に記載されている¹²⁾。

2.2.2 「種々薬帳」中の生薬

「種々薬帳」は、21個の櫃（木箱）に収められた60種の薬物（生薬）の献納目録で、天平時代の医療の様子を伝えるものであり、聖武天皇の死によって誕生した一つの生薬の世界である。記載された薬物の産地は、中国・新羅・西域・ペルシャ・インド・東南アジアに亘っているが、ほとんどが唐からの輸入品であろう。高貴薬ともよばれるこれら生薬で現存するのは38種である⁹⁾。

「種々薬帳」に記載された生薬の内、植物性のものは以下の27種である。

蕤核（眼疾患）・小草（皮膚や肺の腫瘍・扁桃腺炎・腎虚による腰痛）・畢發（滋養強壮・腹痛・下痢）・胡椒（嘔吐・腹痛・下痢）・阿麻勒（消炎止渴：残存なし）・菴麻羅（現在の余甘子で感冒発熱・咳・喉の痛み・高血圧・胃病）・黒黄連（細菌性の下痢・結核による発熱や寝汗）・青箱草（現在の青箱子で眼疾患・皮膚のかゆみ）・白皮（白及の誤りか：外傷の止血：残存なし）・雷丸（条虫の駆除）・鬼臼（鎮静・鎮痛・鎮痙攣）・檳榔子（腹満感・下痢・しぶり腹・悪心・嘔吐）・尖縦容（現在の肉縦容で滋養強壮・疲労倦怠：残存なし）・巴豆（便秘・浮腫）・厚朴（腹満感・腹痛・喘咳）・遠志（咳嗽・滋養強壮）・阿梨勒（腹痛・喉や口内の痛み・下痢）・桂心（発汗・解熱・健胃・鎮痛・鎮静）・羌花（鎮咳去痰・咳嗽・便秘）・人參（強壮作用）・大黃（便秘）・甘草（筋肉のひきつり・腹痛・胃潰瘍・喘咳・腹痛・他の生薬の刺激性や毒性緩和に配合）・蔗糖（砂糖で喉の渇き・喘息・疲労回復：残存なし）・胡同律（喉のはれ・胃痛・歯痛の嗽水）・防葵（残存なし）・狼毒（強い毒性から殺鼠剤：残存なし）・冶葛（アルカロイド系¹³⁾）の猛毒物質を含むので鳥獸捕獲や殺虫剤）

以上、「種々薬帳」に記載された生薬には、消化器系疾患・鎮痛・解熱・鎮咳・目薬など現在の家庭常備薬に相当する生薬が見られ、甘草・人參・大黃などは今もポピュラーな生薬である。残存なしの5種の生薬は、光明皇后が献納した種々薬帳の願文に「若し病苦に縁りて用うべき者あらば、並びに僧綱に知らせて後、充て用うることを聽さん」とあるように必要に応じて出蔵し、使い切ってしまった

たのであろう。生薬を献納した天平勝宝八年（756 年）に人参 50 斤、天平宝字二年（758）治葛 3 両、佳心 100 斤、そして天平宝字五年には多種多量の生薬が出蔵している⁹⁾。これは、別稿¹⁴⁾で詳述するように奈良大仏の造立によって起こったとされる水銀やヒ素など重金属公害が関係しているかもしれない。

ここに、強い毒性の狼毒^{ろうどく}が残存なしとなって使い切っている。治葛^{やかつ}とともに狩猟以外に多くの人の暗殺に使われたのであろうか。聖武天皇存命中に皇嗣となるべき唯一の男児である安積親王^{あさか}が 17 歳で急死している。前述のように、阿部内親王は藤原不比等の娘を母とするが安積親王の母 県犬養^{あさか}は藤原系であったため、彼の死は藤原仲麻呂による毒殺だったのではないだろうか。当時は藤原氏が政権を掌握していた時代であり、結果、藤原系^{あがたのいぬがいのひろと}の血を引く阿部内親王が異例の皇太子となり、孝謙天皇として即位したのである。

2.3 奈良時代の医療制度

養老律令の医療制度に関わる 26 条からなる「医疾令」¹⁰⁾は主に 4 つの項目からなる。

- 1) 医療関係の職員の任用と考課・学生の教育と課試についての規定。
- 2) 薬園の運営と薬園生の内容についての規定。
- 3) 毎年中央で必要とする薬物を確保するための手配の規定。
- 4) 諸国に採薬師を置いて薬物を採取させる規定。

「医疾令」から、宮中内外の医薬制度を担当した典薬寮の付属薬用植物園で薬草が栽培されていたこと、地方から薬物を集めていたこと、各地方に薬物採取者を置いていたことなどが分かる。例えば、諸国の薬物貢進制度は「出雲風土記の意宇の郡」の条からも見て取れる¹⁵⁾。

「凡そ諸の山野に在らゆる草木は、麦門冬^{やますげ}（ユリ科ヤブラン・ジャノヒゲ：健胃・整腸）・独活^{つちたら}（セリ科シシウド：風邪・腰痛）・石斛^{いはぐすり}（ラン科セキコク：強壯剤）・前胡^{のぜり}（セリ科ノダケ：解熱・風邪）・高粱^{かわねぐさ}（ショウガ科クマタケラン：冷腹痛）・連翹^{いたちぐさ}（モクセイ科レンギョウ：解熱）・黄精^{あまな}（ユリ科ナルコユリ：滋養強壯）・百部根^{ふとづら}（ユリ科キジカクシ：鎮咳・駆虫）・貫衆^{おにわらび}（シダ科ヤブソテツ：腹痛・解毒）・白朮^{をけら}（キク科オケラ：健胃・腹痛）・署預^{やまついも}（ヤマモ科ジネンジョ：滋養・腎脾胃）・苦参^{くらら}（マメ科クララ：解熱・腹痛）・細辛^{みらのねぐさ}（ウマノスズグ

サ科：口舌瘡・下痢）・^{いそすぎ}商陸（ヤマゴボウ科ヤマゴボウ：整腸・虫毒）・^{きはそらし}藁本（カラカサバナ科カサモチ：婦人病・頭痛）・^{おしぐさ}玄参（ゴマノハグサ科ゴマノハグサ：解毒・利尿）・^{さねかつら}五味子（モクラン科サネガズラ：鎮咳・美容）・^{ひいらぎ}黄芩（クチビルバナ科コガネバナ：解熱・黄疸）・^{くすのね}葛根（マメ科クズ：発汗・解熱・鎮痙）・^{ふかみぐさ}牡丹（キツネノボタン科ボタン：鎮痛・解熱）・^{やまあさ}藍漆（未詳）・^{わらび}薇（ゼンマイ科ゼンマイ：整腸・浮腫）・^{やまもも}楊梅（ヤマモモ科ヤマモモ：去痰・解毒）・^{きはだ}蘘（マツカゼソウ科キハダ：胃腸・殺菌）・^{つぎ}槻なり。」生薬とならない草木は除いた。また（ ）内の植物の分類と薬効は文献¹⁵⁾の頭注による。意字の山野で採れる生薬の原料となる薬草で所定量が都に貢進されていた。

また、播磨国風土記には、^{かくまぐさ}黄蓮（苦味健胃・殺菌・止瀉薬）・^{くすのね}葛根（鎮痙・発汗・解熱）・^{みらのねぐさ}細辛（口舌瘡・下痢）・^{かのにけくさ}人參（抗疲労・滋養・強壯・降圧）・^{つちたら}独活（風邪・腰痛）・^{やまあさ}藍漆（未詳）・^{とりのあしくさ}升麻（解毒・解熱・止血）・^{おけら}白朮（健胃・腹痛）を産するという記述がみられる^{3, 15)}。

2.4 上品・中品・下品

神農本草経によれば、生薬は上品・中品・下品に分類される¹⁾。

- 1) 上品（薬）は最も重要な生命を養う薬（養命薬）で多量に長期間服用しても副作用がない生薬であり人參（抗疲労・滋養・強壯・降圧）・^{ぶくりよう}茯苓（鎮静・利尿）・^{たいそう}大棗（滋養・強壯・鎮静・鎮痛・利水¹⁶⁾）・^{かんぞう}甘草（鎮痛・鎮咳去痰・甘み薬）・^{こま}胡麻（滋養強壯・解毒・外用薬の基材としてのゴマ油）などがある。
- 2) 中品（薬）は体力を養う薬（保険薬）であるが有毒となる場合があるので注意が必要な生薬で^{とうき}当帰（補血・強壯・鎮痛・婦人病）・^{しやくやく}芍薬（鎮静・鎮痛・鎮痙・収斂薬）・^{まおう}麻黄（発汗・鎮咳去痰）・^{かつこん}葛根（鎮痙・発汗・解熱薬）・^{おうれん}黄蓮（苦味健胃・殺菌・止瀉薬）などがある。
- 3) 下品（薬）は病気の治療薬で副作用があるため長期間服用しないものとされ、^{だいおう}大黃（大腸性瀉下・消炎性健胃・駆瘀血薬）・^{はんげ}半夏（鎮嘔吐・鎮静薬）・^{とうにん}桃仁（消炎・通経・緩下・駆瘀血剤）・^{ぶし}附子（新陳代謝機能促進・強心・利尿・鎮痛薬）・^{きょうにん}杏仁（鎮咳去痰・緩下薬）などがある。

上薬は食物的な要素が多く、長生きと性欲の保存を目的とする中国伝統の医食

同源の考え方を表している。現在のいわゆる西洋薬は下薬に相当し、上薬・中薬は医薬とされない²⁾。薬食同源（医食同源）の考えによる上薬について言えば、万葉人が早春に若菜を摘む習慣は、冬に不足していたビタミンやミネラルを摂取するためであろう。万葉人にビタミンやミネラルの知識はなくとも若菜を食べると生気が甦るのを知っていたのである。野菜が殆ど栽培されていなかったであろう当時、山菜は野菜としての役割が大きかったのである。万葉集の冒頭で5世紀後半に在世したとされる雄略天皇（第21代）が詠っている。

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この丘に 菜摘ます児
家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて
われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ
家をも名をも (1)

（籠よ 美しい籠を持ち 篋よ 美しい篋を手 に この丘に菜を摘む娘よ
あなたはどこの家の娘か そらみつ大和の国は すべて私が従えているのだ
すべて私が支配しているのだ 私こそ明かそう 家柄も 我が名も。）春の野遊びの若菜つみの歌が雄略物語に取り入れられ、その時、「そらみつ」以下が挿入された。

芽生えたばかりの柔らかい芽や葉を摘む春の若菜摘は、まだ雪の日もあるような季節に行う。山部赤人は詠う。

明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ (1427)
標めし野（標野）は朝廷の禁野である。後出の額田王の歌 20 番参照。

雪が消えるころ、わらびが芽生える。志貴皇子が詠んでいる。

石ばしる 垂水の上のさ蕨の 萌え出づる春になりにけるかも (1418)

春の七草はセリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロの山草を指すがそれぞれ、薬効が知られている。セリを天日乾燥したものが生薬・水芹（後出）で食欲増進・貧血に有効である。ナズナは腎臓や肝臓の機能を調える薬効を示す民間薬として用い、ゴギョウ（ハハコグサ）は咳や喉の痛みを抑える薬効があり、ハコベラは整胃・整腸、ホトケノザは食用にはしないが高血圧予防の効果がある。スズナ（カブ）の根にはアミノ酸・ブドウ糖・ペクチン・ビタミンCが含まれ、葉にはビタミンA・ビタミンC・ビタミンB₁・ビタミンB₂が含まれる。スズシロ（ダイコン）はビタミンAとCを含み下痢や消化不良に

薬効がある。

3. 万葉集に詠われた生薬となる草木

漢方薬（漢方処方）とは、2種（2味）以上の生薬を所定の割合で組み合わせた処方薬をいい、漢方で処方する植物由来の生薬は植物の根・茎・葉・花・種子を主原料としている。漢方医学では漢方処方は人が本来もつホメオスタシス（恒常性）を刺激していると考ええる。その生体の恒常性は**気・血・水**の三要素が体内を循環することによって維持されると考える³⁾。

- 1) **気**は人間の体中を巡っている根源的なエネルギーで各器官を正常に働かせ自律神経や免疫機能のコントロールを行う。
- 2) **血**は血管内を流れ、全身に酸素と栄養を運ぶ。
- 3) **水**は血液以外の体液でリンパ液・細胞内液・細胞間質液・胃液・消化液・唾液・涙・尿などを含む津液^{しんえき}¹⁶⁾である。

漢方医学は、これら3つの流れをバランスよく滞りなくするのが治療の目的で、人間の自然治癒力を後押ししているとする。一方、民間薬は、理論的で体系的に組み立てられた医学的な背景はなく経験による薬効をもとに使用され、多くは1種類（1味または単味）の生薬が使用され、処方を構成しない²⁾。よく知られた民間薬となる薬草にはゲンノショウコ（下痢止め・健胃・整腸薬）、ドクダミ（解熱・解毒・消炎薬・利尿剤）、センブリ（健胃整腸薬で苦味配糖体が含まれるため「良薬口に苦し」が最も当てはまる薬）などがある。

生薬はその薬効から、**発汗解表薬・清熱薬・健胃と止瀉薬・温病補陰薬・気薬・血薬・水薬・駆虫薬・外用薬**、その他に分類される。現在、漢方薬は平成24年8月に発出された厚生労働省通知「一般用漢方製剤承認基準の改正について」によって規定されており、漢方薬294品目について、成分・用法・用量・効能効果などの具体的な基準が示されている¹⁷⁾。

本報では、概ね厚生労働省通知に収載された処方（以下、**漢方294処方**とする）に用いられる生薬を薬効による分類に従って整理し、それぞれの基原（原料）となる植物を織り込んだ歌を万葉集から選んだ。そして、万葉歌から万葉時代の人々の植物に対する表情や自然観そして生活の実態を推量するとともに植物の生薬としての薬効と漢方処方について知ることとした。ただし、歌意と生薬の薬

効とは直接的な関係はない。なお、植物の古名は服部らの論文¹⁸⁾と「万葉植物物語」¹⁹⁾に依り、写真は文献¹⁹⁾と Wikipedia から転載した。また、取り上げた植物の生薬としての薬効と適用については、文献¹⁻³⁾の他、「新常用和漢薬集」²⁰⁾、「日本の薬草」²¹⁾、「漢方革命」²²⁾、「漢方革命Ⅱ」²³⁾に依った。

3.1 発汗解表薬

解表とは体表血管を発汗させて体表に現れた症状を取り除くことであり、この生薬は悪寒・発熱・頭痛などの症状、筋肉・関節などに腫れがあり発汗させる必要がある症状に用いる。発汗解表薬は、1) 高い発熱・軽い悪寒・頭痛・咽頭部の発赤腫脹・口が乾くときに用いる辛涼発表薬（葛根・薄荷・柴胡などの生薬を配合）と 2) 軽い発熱・強い悪寒・頭痛・関節炎・鼻水などのときに用いる辛温発表薬（細辛・麻黄・桂枝などの生薬を配合）に分類される。

3.1.1 辛涼発表薬としてのクズ

クズはマメ科のつる性の多年草で旺盛な繁殖力と長く伸びる蔓から万葉人にとっては長命を願う植物であった。クズの花の開花時期は8～9月で赤紫色の甘い香りを発する花を咲かす。万葉集にはクズが二十首以上詠み込まれており、山上憶良は秋の野に愛でる花を七つあげ、その一つに選んでいる。



秋の野に咲きたる花を 指折りかき数振れば七種の花 (1537)

萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花 また 藤袴 朝顔の花 (1538)

秋の七草は陰暦7月7日の行われた宮中行事の乞巧奠（現在の七夕）に供えるため、七種の花の選定が必要であった。萩の花・薄・クズの花・撫子・女郎花・藤袴・朝顔の七種の花が選定されたというのが憶良の創作かもしれない。なお、アサガオは現在のキキョウのことである。

夏と秋の雑歌にもクズが詠み込まれている。いずれも「詠み人知らず」である。

霍公鳥鳴く声聞くや卯の花の咲き散る岳に 田葛引く少女 (1942)

（カッコウの鳴く声を聞いたであろうか 初夏に咲く卯の花が咲いて散る丘で

クズを引いて採っている鄙の乙女は。) 田舎の可愛い少女が思い描かれるが、クズの根は道具なしに掘り起こすのは無理なのでここでは茎を引き、その皮を剥いで繊維として葛布くずふを織るのであろう。ちなみに、クズの花言葉は芯の強さ・活力・恋のため息だという。詠み人は逞しい少女に恋したのであろうか。

雁かりがねの寒く鳴きしゆ水茎みづくきの岡くずぼの葛葉は色づきにけり (2208)

(雁が寒々と鳴き渡って以来 水茎の生える丘のクズの葉は黄葉し続けたことよ。) 黄葉したクズの大きい葉っぱが風に翻って目立っている。寒くなって風邪を引いたら葛根湯を飲まねばなるまい。

葛の肥大した根を乾燥したものは生薬・葛根かつこんであり、主要成分としてデンプン・イソフラボノイド²⁴⁾・トリテルペノイドサポニン²⁵⁾などを含む。発汗作用・鎮痛作用・解熱作用があるので風邪や胃腸不良(下痢)のときに葛根単味で古来用いられてきた民間治療薬である。

葛根を主材とするポピュラーな漢方薬である葛根湯に配合される生薬は麻黄まおう・桂皮けいひ・芍薬しゃくやく・生姜しょうが・大棗たいそう・甘草かんそうである。麻黄の主成分は交感神経興奮作用のあるアルカロイド¹³⁾のエフェドリンで鎮咳・去痰の薬効があり、桂皮は辛味と芳香がある健胃剤、芍薬は代表的な鎮痛剤、生姜と大棗は方剤全体の副作用を緩和するために用いられ、甘草は甘みをもち鎮痛鎮咳の薬効がある。葛根湯は風邪の初期で寒気があり、肩・首筋の凝り・頭痛・鼻水・鼻づまりなどの症状のときに用いることが多いが血行を良くする効果もあるので筋肉痛・神経痛・血行障害の症状のときにも有効とされる。葛根湯以外に、漢方 294 処方では、葛根紅花湯(葛根+紅花+芍薬+大黃+その他: 顔面や上背部の充血を除く)・麗沢通気湯(葛根+葱白そうはく+蒼朮+甘草+茯苓+その他: 発汗を促し頭痛・鼻炎に効く)など 14 処方に配合される。ここに、カッコ内は漢方薬に配合される生薬と薬効を示している。

3.1.2 辛温發表薬としてのアオイ

アオイにはタチアオイ・フユアオイ・モミジアオイ・フタバアオイなど数種あるがここではフユアオイとする。詠み人知らずの戯笑歌が 6 種の食べられる植物の中にアオイを織り込んでいる。

梨なし棗なつめきみ黍あわづに菓は嗣きぎ延くずふ田あふひ葛の後も逢はむと 葵 花咲く (3834)

(梨がなり 棗が実り 黍も粟も実って蔓を這わせる葛のように〈年月を経て〉後にまた会いましょうとアオイに花が咲くよ。)
 「黍」は「君」、「粟」は「逢は」、「葵」は「逢ふ日」に懸け、季節順に梨・棗・黍・粟・葛・葵を詠っている。今は食用にしないが、万葉時代は食用のアオイの若葉を採取する風景が見られたのである。



秋から冬の開花期に地下の根茎と根を陰干したものが生薬・**土細辛**である。芳香成分としてメチルオイゲノールなどの精油²⁶⁾・辛味成分・アルカロイド¹³⁾が含まれる。**土細辛**には辛鎮咳作用があり、喘息・頭痛・鼻炎に用いたが、現在、流通していない。なお、生薬・**細辛**の基原はケイリンサイシンで、解熱・鎮痛の作用がある。**漢方 294 処方**では、小青竜湯(**細辛**・**五味子**：喘咳を治す)などに配合される。

3.2 清熱薬

清熱とは熱を冷やすことである。漢方でいう熱は炎症・充血・神経の興奮・熱感・のぼせ・ほてり・イライラ・口渇など多岐にわたる症状を意味する。従って、清熱薬はこれらの熱の諸症状を緩和する生薬で、**紫根**・**敗醬**・**黄連**・**柴胡**・**山帰来**など多岐にわたる。

3.2.1 清熱薬としてのムラサキ

ムラサキは多年草で初夏から夏にかけて小さな白い花が群がって咲くことから名づけられたという。万葉集にはムラサキを詠った歌は十首あるが、**額田王**と**天智天皇**と**大海人皇子**(後の**天武天皇**)の三角関係を思わせる歌を取り上げる。**額田王**は**大海人皇子**に嫁して**十市皇女**を産んだのち、**大海人皇子**の兄・**天智天皇**に寵愛されたという。しかし、三角関係を推量する根拠となったのは酒席の座興の歌一戯歌応酬²⁷⁾ともいわれる次の二首のみで、三者の実際の関係は不明である。天智七年(668年)五月五日、天皇が蒲生野(滋賀県近江八幡市・八日市市・安土町にかけての野)に**薬** ^{くすり} ^が ^り ²⁷⁾したときに



額田王が詠った。

あかねさす ^{むらさきの}紫 ^{しめの}野行き ^{の もり}標野行き野守は見ずや君が袖振る (20)

(茜色を帯びる ムラサキの野を行き その御料地の野を行きながら 野の番人は見ていないでしょうか あなたが袖をお振りになることを。) 標野は、当時、朝廷が各地にムラサキ(紫草)の栽培を命じており、その栽園として印をつけた管轄の野のことなので野守のことを天智天皇とする解釈もある。

大海人皇子は答えて

^{むらさき}紫草のにほへる ^{いも}妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも (21)

(ムラサキのように美しいあなたが憎かったら あなたは人妻なのに どうして恋い慕うことがあるのでしょうか。) ここに、「にほへる」は彩や香りが漂い来る状態を云う言葉で「にほひ」²⁸⁾は色香の意味を持つので額田王の艶やかでなまめかしい姿を表現している。しかし、ムラサキの根の薬効に発情抑制や火傷治療があるが無理に関連付けることはないだろう。

ムラサキの紫色をした根のエキ스는生薬・紫根といい、ナフトキノン類を含む。発情抑制・肉芽増殖促進・軽度な血管透過性亢進・創傷治癒促進などの薬効があるので軟膏剤として皮膚病・痔疾・火傷・凍傷に用いられる。漢方 294 処方では、紫雲膏(紫根+当帰+ゴマ油+豚脂+その他：痔やけどの特効薬)と紫根牡蛎湯(紫根+牡蛎+甘草+川芎+その他：難治性の腫瘍・皮膚病に効果)の2処方にのみ配合される。

3.2.2 清熱薬としてのオミナエシ

オミナエシは多年生植物で秋の七草に数えられる。

オミナエシの古名はヲミナヘシ。^{おんなめし}女飯の意で、花の黄色を粟飯に例えて付けた名前といわれる。

手に取れば袖さへにほふ女郎花この白露に

散らまく ^も惜しも (2115)

(手に取ると袖までも〈美しく〉彩られてしまうオミナエシが この白露によって散っていくことが惜しまれるよ。)^{いろどり}「にほふ」は、上述のように美しい 彩 に染まる、あるいは鮮やかに色づくというような意味である。



わが郷に今咲く花の女郎花堪へぬ情になほ恋ひにけり (2279)

(わが里に今盛りのオミナエシ〈のような可憐なあの娘〉よ 堪えがたい気持ちでやはり恋に苦しむことだ。)「娘よ恋しいよ」と詠っている。オミナエシの薬効が清熱であることを知ってか知らずか。

オミナエシの全草を乾燥したものを生薬・敗醬^{はいしょう}といい、根を乾燥したものを敗醬根という。敗醬にはサポニン、モノテルペン²⁹⁾、およびステロール類³⁰⁾を含み、これらが血行を良くする作用があり、清熱して解毒・瘀血³¹⁾を破り排膿するので、腹痛・下痢・子宮出血などに用いる。漢方 294 処方では、薏苡附子敗醬散(敗醬+薏苡仁^{よくいじん}+附子^{ぶし}: 排膿促進)にのみ配合される。

3.3 健胃・止瀉薬

健胃・止瀉薬は胃腸系の機能を調べ、あわせて下痢を止める薬物を指す。病状により、清熱する場合と温補する場合がある。清熱は上述のように熱を取ること、温補^{おんぽ}は温め補うことである³²⁾。烏梅^{うばい}・山楂子^{さんざし}などの生薬がある。

3.3.1 健胃・止瀉薬としてのウメ

ウメはバラ科の落葉高木で、早春に葉に先立って5弁の香気の高い白・紅・薄紅色の花をつける。縄文時代の遺跡には見られず弥生時代の遺跡から見つかったことから、稲作とともに列島に入ってきたのかもしれないが、遣唐使が持ち帰ったとも考えられる。万葉時代、梅は外来の植物として珍重されていて、万葉集では百二十首近く詠まれている。



天平二年(730年)正月十三日、大宰府の長官・大伴旅人宅で梅見の酒宴が開かれた。宴たけなわの頃、旅人は出席者に歌を詠もうではないかと呼びかけ、梅を織り込んだ三十二首の歌ができた。万葉集第五巻に載る「梅花の歌三十二首併せて序」には「・・・時に 初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薫す・・・以下略」(・・・時あたかも新春の良き月、空気は美しく風は柔らかに 梅は美女の鏡の前に装う白粉の如く白く咲き、蘭は身を飾った香の如きかおりをただよわせている・・・ここに天をきぬがさとし地

を座として、人々は膝を近づけて酒盃を酌み交わしている・・・中国でも多く落梅の詩篇がある。古今異なるはずとてなく よろしく庭の梅を詠んでいささかの歌をつくろうではないか。）とある。ここに、平成に次ぐ新しい年号、令和はこの旅人の梅花の歌の序に在る令月と風和ぎに依拠している。令は麗や善である。旅人自身は詠う。

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも (822)
 (我が庭に梅の花が散る 天涯の果てから雪が流れ来るよ。) 散る梅の花を雪と見ているので梅は白梅である。

大宰府駐在の薬師張氏福子が詠う。

梅の花咲きて散りなば櫻花継ぎて咲くべくなりにてあらずや (829)
 (梅の花が咲き 散ってしまったなら 桜の花が続けて咲くようになっているのではないか。) 薬師は医師のこと。

梅の果実を燻製または蒸して晒したものを生薬・烏梅という。烏梅にはコハク酸・クエン酸・リンゴ酸・酒石酸・オレアノール酸・アミグダリンなどが含まれており、強壮剤で興奮・鎮痛・鎮痙作用がある。また、津液の分泌を促すので主に健胃整腸に使われるが、発熱・咳・風邪薬としても用いられる。烏梅は漢方294 処方では、杏蘇散(烏梅+五味子+陳皮+桔梗+その他:浮腫を除き鎮咳去痰に効く)と椒梅湯(烏梅+山椒+桂皮+厚朴+その他:胃腸を温め、腹痛を止め、駆虫作用がある)の2 処方にのみ配合される。

3.4 温病補陰薬

温病は感染性発熱疾患の総称で、外邪によって起こるとされるがその内容は必ずしも一定ではない。例えば、今ではSARS(重症急性呼吸器症候群)やインフルエンザなどが挙げられる。補陰の陰は津液および血液などを意味する。この陰が不足してのどの渇き・発熱・目のかすみ・性機能の低下・めまい・耳鳴り・便秘などの症状が現れ、慢性化している場合を陰虚という。陰虚には肺・肝・腎・胃・大腸が関係し、陰液(栄養のある水)を増やすことが大切である。従って、補陰とは身体のこれら構成成分を補うことで、温病補陰薬は感染性の発熱疾患で津液などを補充して陰虚を解消する薬であり、麦門冬・地黄・石斛などの生薬がある。

3.4.1 温病補陰薬としてのヤブラン

ヤブランは常緑性の多年草、8～10月に青紫から白色の花をつけ、黒い実になる。ヤブランの古名はヤマスゲ（山菅）。古今の相聞往来の類で物に寄せて思いを陳べた歌が一首ある。

ぬばたま^{ぬばたま}の黒髪山の山菅^{やますげ}に小雨^{こさめ}降りしき
しくしく思ほゆ (2456)



(ぬばたまの 黒髪山のヤマスゲに 小雨が降りしきるように 恋人のことがしきりに思われるよ。)「しくしく」は、絶え間なくというようなこと。

あしひきの名に負ふう山菅押しふせて君し結^{むす}ばば逢はざらめや (2477)
(あしひきの 山を名にもつ ヤマスゲを押しふせるように 強引にあなたが契りを結ぼうというなら〈私があなたと〉どうして逢わないことがありますようか。)あなたが山菅のように野生的になって、もっと積極的に私を誘ってくれれば・・・OKよといっている。ヤブランの根は強壯剤にもなるのだ。

ヤブランの根の肥大部分を初冬に掘り出し、乾燥したものが生薬・^{ばくもんどう}麦門冬であり、ボルネオール・ホモイソフラボノイド・ステロイドサポニン・多糖類を含む。肺の津液不足による乾咳・吐血・咯血の他、鎮咳・去痰に漢方処方される。また、精力減退・疲労倦怠に滋養・強壯剤としても用いる。漢方 294 処方では、麦門冬湯（^{こくべい}麦門冬＋^{こくべい}粳米：胃・喉・肺の津液を補い、鎮咳去痰に効く）・加味四物湯（^{こくべい}麦門冬＋^{こくべい}当帰＋芍薬＋川芎＋蒼朮＋人参＋その他：滋養強壯・関節や神経痛の鎮痛・消炎に効く）など 23 処方に配合される。

3.5 気薬

漢方では、「気」は生命活動のエネルギー及びその元をいい、血液や津液を全身に循環させ各臓器や組織に活動力を与えている。

- 1) 万物が成長するための自然界の気である生氣。
- 2) 生物の活動エネルギーの元である原気（元氣）。
- 3) 人体を構成し、生命活動を維持する物質を意味する精気、その他がある。

気薬とは、気の上衡（精神不安の状態）・沈滞・鬱滞など氣に障害を生じた結果現れる、のぼせ・動悸・精神不安・躁うつ病・不眠・異常興奮などの症状を改

善する薬である。症状により補気強壯薬・行気薬・鎮静薬に分類される。

3.5.1 補気強壯薬

補気強壯薬は「気」を産生するもとである胃腸系を強め、気を補うとともに体全体の強壯を図る薬物で^{たいそう}大棗・^{きゅうはく}韭白・^{れんにく}蓮肉・^{おうぎ}黄耆・^{かんぞう}甘草などの生薬がある。

3.5.1.1 補気強壯薬としてのナツメ

夏に芽を吹くので夏芽という落葉高木のナツメは、中国では古くから五果（桃・栗・杏・李・棗）の一つとして珍重されている。ナツメは遣隋使か遣唐使が持ち帰ったものであろうか。奈良時代にはすでに渡来しており、万葉集には二首詠われている。一首は上掲の6種の食べられる植物を織り込んだ詠み人知らずの戯笑歌 3834 番 (3.1.2 項) であるが、もう一首は、



^{たまはき}玉 掃^こ刈り来^こ鎌磨^{かま}磨^{むろ}室の樹と棗^{もと}が本^はと^はかき掃かむため (3830)

(玉掃を刈り取って来い 鎌磨よ 室の木とナツメの木の下を掃除したいから。)

^{むろ}室の木はヒノキ科の常緑樹で^{ねづ}杜松ともいう。玉掃の玉は美称で、^{ばはき}掃はほうき。ここではその材料のコウヤボウキのこと。また、飾り物の玉掃で掃くというのにユーモアがある。ちなみに、ヨーロッパ産の杜松実^{としようじつ}はジンの香り付けに用いる。

ナツメの完熟した実を乾燥したものが生薬・^{たいそう}大棗である。大棗には糖分・有機酸・サポニン・トリテルペン・ベンジルアルコール配糖体³³⁾が含まれており、胃腸系の虚弱による食欲不振・神経症による緊張の緩和・強壯・鎮静・利尿の作用がある。漢方 294 処方では、葛根湯（上掲）・桂枝湯（大棗＋桂皮＋生姜＋甘草＋芍薬：頭痛・寒気・微熱・のぼせなどに効く）・苓桂甘棗湯（大棗＋桂皮＋^{かんぞう}甘草＋^{ぶくりよう}茯苓：心悸亢進・ヒステリー・ノイローゼに効く）など 90 処方に配薬される重要な生薬である。

3.5.1.2 補気強壯薬としてのニラ

ニラはネギ属の多年草で緑黄色野菜である。ニラを詠った歌は東歌に一首あ

る。ニラの古名はミラ。ククは茎なので歌に織り込まれたククミラはニラの花茎が伸びたもの。ニラには独特のにおいがあるので邪気を払うとされていた。

伎波都久の岡の茎^{くくみら}蕪れ摘めど

籠^こにもものたなふ背^せなと摘まされ (3444)

(きはつくの岡のククニラを私は摘むのだが籠一杯にはならない・・・あの人と一緒に摘みなさいな。) ニラ摘みの歌で、「きはつく」は現在の茨城県桜川市真壁町か。「のた」はミタの訛りで、「なふ」は否定。また、末句は別の人が唱和しており、掛け合いとなっている。

ニラの葉や茎は食用にもなるが葉は生薬・^{きやうはく}蕪白となる。アイリン(後出)などを含み胃腸系を温め、気をめぐらして瘀血を除く。また、強精、強壯作用がある。漢方 294 処方では、滋血潤腸湯(^{きやうはく}蕪白+桃仁)にのみ配合される。



3.5.1.3 補気強壯薬としてのハス

古代インドで生まれた仏教では、西方浄土の極楽は神聖なハスの池だと信じられていたのだろう。

お釈迦さまはハスの葉の^{うてな}台に坐っておられる。この姿は古くからハスの薬効が知られ、有用な植物であったことを意味するのではないだろうか。ハスは水生の多年草。夏に紅、淡紅あるいは白色の



花が咲き、晩秋に節の多い根茎の末端部が肥厚して食用の蓮根となる。ハスを織り込んだ歌は万葉集に四首あるが、内三首は葉を器として食物を盛っている。

^{はちすば}蓮葉はかくこそあるもの意^お吉^き麿^{まろ}が家なるものは^{うも}芋の葉にあるらし (3826)

(食べ物を盛るのに用いたハスの葉とはこのようにこそあるもの〈これに比べて〉意吉麿の家にあるハスの葉は芋の葉のようですね。) 酒宴で美しいハスの葉と芋の葉を比べて詠んでいる。

ひさかたの雨も降らぬか^{はちすば}蓮葉^{たま}に^{たま}浮れる水の玉に似たる見む (3837)

(ひさかたの雨が降ってくれないかな ハスの葉に溜まった水の玉に似たのも見たいものだ。) この歌には次の解説がある。「一人の右兵衛の官人がいた。名前は詳らかでない。その者は歌を作ることが極めて巧みであった。ある時、右兵

衛の役所に酒食を供えて役人たちを馳走したことがあった。食べ物はずべてハスの葉に盛ってあった。集まった人々は酒宴が最高潮に達し、こもごも歌い舞った。その時、皆が兵衛の者を誘って言うには『そのハスの葉かに關けて歌を作れ』と。するとすぐ声に応じてこの歌をつくった。」兵衛は兵衛府に属し、内裏の内郭の門を守衛し、かつ行幸に供奉した兵士のこと。

もう一首、天武天皇の第七子新田部親王にひたべのみこに献上した作主不明の歌がある。

勝間田の池はわれ知る蓮はちす無し然しか言う君が髭ひげ無き如し (3835)

(勝間田の池は私は知っております ハスなどありません そういうあなたに髭がないのと同じです。) この歌の後にも解説が付いている。「右の歌は、ある人が聞くところによると、次のようである。新田部親王が都の中を散策して勝間田の池をご覧になり、御心に感じるところがあった。その池から帰った後も感動を黙っていることができなかった。その時、一人の婦人に語って言うには『今日出かけて行って勝間田の池を見ると、一面にみなぎり波たち、蓮の花は輝くほどであった。面白さは腸をちぎるばかりで言葉にできない』と。そこで婦人がこの戯れ歌を作ってもつばら口ずさんだということだ。」実際にはないハスをあるというのは作主が「蓮れん」に「恋れん」をかけて夫人に戯れたのであろう。ちなみに、天平七年(735年)に新田部親王の薨後、旧宅地は唐大和上・鑑真に下賜され、天平宝字三年(759年)、唐招提寺となった。

ハスの各部位はそれぞれ、生薬として有用である。皮付きの果実を蓮実れんじつ、皮を剥いで乾燥した種子を蓮肉れんにく(蓮子れんし)、幼芽を蓮心れんしん、種皮を蓮衣れんい、葉を荷葉かえふ、葉の基部を荷葉蒂かえふてい、葉や花の柄を荷梗かこう、花のつぼみを蓮房れんぼう、おしべを蓮鬚れんしゆ、根茎を藕くわう、根茎の節を藕節くわうせつ、デンプンを藕粉くわうふんという。

気薬としては、ロツシン・メチルコリバリンなどのアルカロイドを含む蓮実・蓮肉れんにく(蓮子れんし)が用いられ、滋養強壮・健胃・利尿・下痢止め・鎮静・多夢³⁴⁾・遺精³⁵⁾・小便混濁・腰気³⁶⁾に薬効がある。漢方294処方では、蓮肉は参苓白朮散じんりょうびやくじゅつ(蓮肉+人參+白朮+桔梗+甘草+その他：胃腸虚弱的下痢に効く)・清心蓮子飲せいしんれんし(蓮肉+麦門冬+茯苓+人參+黄芩おうこん+その他：残尿感・頻尿・排尿痛などに効く)・啓脾湯けいひとう(蓮肉+蒼朮+茯苓+甘草+その他：消化不良慢性胃腸炎・病後の胃腸強壮に効く)の3処方にもみ配合される。

3.5.2 行気薬

行気薬は、上述の「気」が滞った状態であるために起こる頭痛・めまい・耳鳴り・のどの違和感・手足の倦怠など諸所の症状を改善する生薬で、^{がいはく}薤白・^{せきしょう}石菖根・^{こん}陳皮・^{ちんぴ}沈香などがある。

3.5.2.1 行気薬としてのノビル

ネギ属のヒルはニンニク・ノビル・ネギの古名で古くから薬とともに鱗茎が食用にされていたが、仏教では、臭みのあるヒル・ニンニク・ニラ・ネギ・ラッキョウは五葷として食することは禁じられていた。

古事記の応神天皇（第15代、在位：5世紀前後）の条では天皇がノビルを織り込んだ歌を詠っている。応神天皇は日向国の^{かみながひめ}髪長比売が美しいと聞いて召し上げられた。その時、太子の^{おほささきみこと}大雀命（後の仁徳天皇）が彼女を見て、美しさに心が動き、建内宿禰大臣に、「髪長比売を私に下さるように天皇に言ってくれ」と頼む。天皇は直ちに髪長比売を太子に与えた。天皇は酒宴で、髪長比売に酒を盛った柏の葉を持たせて太子に与えさせたのである。そういう形をとることで、天皇に酒を献じる後宮の女性としての立場から転じさせて大雀命に与えることとしたのである。そして歌を詠った。



いざ子ども ^{のびるつ}野蒜摘みに ^{ひる}蒜摘みに 我が行く道の ^{かぐは}香細し 花橘は ^ほ上
つ枝は ^{とりあから}鳥居枯し 下枝は ^{しづえ}人取り枯し 三つ栗の ^{くり}中つ枝の ほつもり
赤ら嬢子を ^{をとめ}誘ささば ^{いざ}宜しな

（さあお前たち ノビルを摘みに行こうではないか ヒルを摘みに私が行く道にある ^{かぐわ}香しい花橘は 上の枝は鳥が止まって枯らし 下の枝は人が取って枯らしているから だれも手を付けていない 三つ栗の 中ほどの枝の ほつもり 紅顔の乙女を誘えばいい。）「ほつもり」は未詳。ここでの野蒜摘みに行こうというのは遊びの場で、女を誘うように比売を誘えばよからうという趣旨である。

万葉集の第16巻に長忌寸意吉麻呂八首とする一連の歌がある。その一首の「酢、^す醬、^{ひしほ}蒜、^{ひる}鯛、^{たひ}水葱を詠める歌」は、

^{ひしほ}醬 ^す酢に ^{ひるつ}蒜掲き合て ^か鯛願ふわれにな見え ^{なぎ}そ水葱の ^{あつもの}羹 (3829)

(醬と酢にヒルを混ぜ合わせて鯛を食べたいと思うものを 私に見せるな 水葱の羹を一そんなものはいらぬよ。) 醬は小麦や大豆を麴と塩を加えて発酵させた作った醤油のもろみのようなもの。羹^{あつもの}はお吸い物。水葱はミズアオイのことで食用として栽培することが広く奨励されていた。

ノビルはニラ・ニンニク・ラッキョウなどの独特の臭気のもとであるアリルイオウ化合物であるアリインを含む。アリインは空気に触れると強い殺菌作用をもつアリシン変化し、体内でビタミンB₁(チアミン)と結合してアリチアミンとなる。そしてアリチアミンはハマグリや魚に含まれるビタミンB₁を分解する酵素アノイリナーゼの作用を阻害する。従って、アリシンを含むニラやヒルとハマグリや魚とを和えて膾^{なます}とするとアリチアミンが作用してビタミンB₁の分解が抑制される。その結果、ビタミンB₁の吸収を高めることになり疲労回復に効果を発揮する。長忌寸意古麻呂が食べたいと願った鯛とヒルを和えたものは栄養学的な理にかなった調理法なのである³⁷⁾。

ノビルの鱗茎^{りんけい}を乾燥したものがニンニク臭のする生薬・薤白^{がいぱく}である。ただ、現在の日本市場では、日本産のラッキョウを原料にした薤白が流通している。ステロイド配糖体・酸アミド³⁸⁾・アリインやジアリルジスルフィドなどの含硫化合物が含まれる。狭心症を含む胸が塞がれた感じ・呼吸困難による胸痛・喘咳で痰の多いとき・下痢の一種のしぶり腹・化膿性腫物に薬効を示す。ノビルは単味で民間薬としても用いられており、全草を乾燥させ煎じて服用すると血を補い熟睡できるとされる。また、根茎をすり潰したものは虫刺されに効く。漢方294処方では、栝楼薤白酒湯(薤白+栝楼実+白酒:狭心症や心筋梗塞に効く)と栝楼薤白湯の2処方にのみ配合される。

3.5.2.2 行気薬としてのショウブ

ショウブ(菖蒲)はサトイモ科の多年草。ショウブの古名はアヤメグサ。天平二十(748)年三月二十三日、左大臣橘諸兄^{たちばなのもろえ}の使者として田辺史福麻呂^{たなべのふひとふくまろ}が越中に赴き、国守である大伴家持^{おおとものやかもち}の館で饗応を受けたときに詠んだ歌。

ほととぎすいとふ時なし菖蒲草 蘂にせむ日こゆ鳴き渡れ (4035)

(ホトトギスの声は嫌に思う時はない いつ聞いてもいいが とりわけショウブを蘂にする日に ここを通して鳴き渡ってほしい。) 端午の節句に、ショウブ

を蓐（髪飾り）にした。本来、この習慣は植物の生命力を付加させる呪術だったが、ここでは夏の風流としている。

ショウブの根茎を乾燥したものが生薬・**菖蒲根**で健胃・鎮痛・鎮静に薬効を示す。ショウブの芳香にはテルペン類の他、精油のアザロン・オイゲノールが含まれ、これらの成分は血行促進や疲労回復に効果がある。漢方処方としては「和漢薬考」に独活湯に配合されているが漢方 294 処方の独活湯では菖蒲根は配合されない。



3.5.2.3 行気薬としてのミカン

食用ミカンの古名はタチバナ。列島に野生していた日本固有のカンキツである。多くの植物が枯れる秋から冬に常緑の葉でたくさんの黄金色の実を付けることから繁栄や長寿を象徴するタチバナは万葉集に七十二首も詠まれている。「冬十一月に
さだいべんかつらきのおほきみたち かばねたちばなのうち
左大辨葛城王等に姓橘氏を賜ひし時の
おほきみたち
御製歌一首」として、聖武天皇は詠った。



橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹 (1009)

(タチバナは実までも花までも輝き その葉まで枝に霜が降りてもますます常緑である木よ。)

この歌の題詞には「天平八(736)年十一月、従三位葛城王と従四位上佐為王が皇族を離れ、外戚の橘姓を賜った。その時、元正太上天皇、光明皇后とともに皇后の宮殿で御宴を催し、その場で聖武天皇が橘を誉める歌をお作りになり、加えて御酒を賜った。・・・」とある。橘三千代の子・葛城王は、



ヤマトタチバナ

臣籍降下して母の橘姓を継いで橘諸兄を名乗り、母の後ろ盾を得て藤原氏一族を凌ぐ大きな権力を握るようになり、遣唐使の経験のある吉備真備や僧玄昉をブレーンとして聖武天皇を補佐した。恭仁京への遷都や奈良東大寺の大仏建立に尽

力したとされる。

もう一首、「橘の歌一首 遊行女婦」^{うかれめ}とある歌を挙げる。

君が家の花橘は成りにけり花なる時に逢はましものを (1492)

(あなたの家のハナタチバナは もう実になってしまったのですね 花の間に
お会いしたかったのに。) 遊行女婦は宴席で貴人たちの前で歌舞をする遊女のこ
と。実になる(結婚する)前の青春の頃にお会いしたかったですねと言っている。

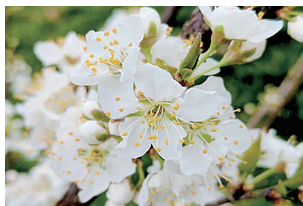
タチバナやその栽培変種のウンシュウミカンの成熟した果実の果皮を乾燥し
たものが生薬・橘皮^{きっぴ}あるいは生薬・陳皮^{ちんぴ}というが両者に区別はない。果皮にはリ
モネン・リナロール・テルピネオールなどの精油・フラバノン配糖体のヘスペリ
ジン・ビタミンC・カロテン・ルチンなどが含まれる。芳香性健胃薬として消化
不良・胃炎・吐き気・しゃっくりに用いる他、発汗剤・鎮咳去痰薬として感冒に
用いる。漢方 294 処方では、陳皮は加味温胆湯(陳皮+茯苓+甘草+大棗+生^{うんたんとう}姜^{しょうきょう}
+その他: 胃弱や神経症・不眠症に効く)・平胃散(陳皮+蒼朮+厚朴+大棗+
甘草+生^{しょうきょう}姜: 胃炎や消化不良・食欲不振に効く) など 48 処方に配合される。

3.5.3 鎮静薬

「気」が上部に突き上げてくることによって起こるのぼせ・頭重感・動悸・身
体動揺・精神不安などの症状を鎮静して改善する生薬で李根皮^{りこんび}・遠志^{おんじ}・酸棗仁^{さんそうにん}
などがある。

3.5.3.1 鎮静薬としてのスモモ

スモモはバラ科の落葉小高木の果実でモモ
より酸味が強いのでその名がある。初春に白い
花をつけ、6月下旬～8月中旬に果実が収穫で
きる。奈良大仏本体の鑄造が終わった翌年の



「天平勝宝二年(750年)三月一日の暮^{ゆふへ}に春の
苑^{ももすもも}の桃李^なの花を眺^{なが}めて作れる二首」とある内、
スモモの歌(モモを詠んだ歌は後出 4139 番)。

わが園^{その}の李^{すもも}の花か庭^{には}に降るはだれのいまだ残りたるかも (4140)

(我が庭上のスモモの落花か それとも庭に降った 斑^{まだら}雪がまだ消え残っている

のか。) 遠くの山に残雪がある頃、スモモの花は咲く。梅と同じく春の到来を知る花だったようだ。薄暮では、落ちたスモモの花と雪が紛らわしいのだ。

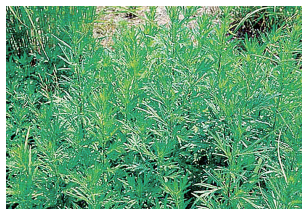
スモモの根皮の甘皮部分(根の外皮の直ぐ内側にある柔らかな部分)を乾燥したものは生薬・**李根皮**^{りこんび}というが成分・薬理は未詳である。清熱・降気に効能があり、精神安定作用がある。口の渇きや胸がもやもやして苦しいとき、あるいは発作性の神経性動悸に用いる。漢方 294 処方では、定悸飲^{ていきいん}(李根皮+甘草+茯苓+牡蛎+桂皮+その他: 動悸や不安神経症に効く)と奔豚湯^{ほんとうとう}(金匱要略に記載)の2処方にのみ配合される。

3.6 血薬

血薬とは、血液不足または血行不良によって起こる諸症状の血虚(貧血気味の状態)と血の巡りが悪くなっている状態の瘀血^{おけつ}が原因として起こる諸症状に対してその改善をはかる薬である。通常、補血薬と駆瘀血薬^{くおけつやく}に分類される。補血薬は血虚を改善する薬である。血液成分を補い、血液不足または血行不良によって起こる貧血・倦怠感・低血圧・顔色の悪さ・不安感・眠りの浅さ・めまい・息切れなどの諸症状を改善する**艾葉**^{がいよう}・**胡麻**^{こま}・**芍薬**^{とうき}・**当帰**などがある。一方、駆瘀血薬は、体内に滞積した非生理的な血液を排除することにより血行を調べ、冷え・のぼせ・顔面紅潮・吹き出物・内出血・精神不安などの諸症状を改善する生薬で**紅花**^{こうか}・**桃仁**^{とうにん}・**益母草**^{やくもそう}・**鬱金**^{うこん}・**川芎**^{せんきゆう}などがある。

3.6.1 補血薬としてのヨモギ

キク科の多年草のヨモギを詠んだ歌は、大伴家持の長歌が一首だけある。詞書には、「越中の国の掾官^{じょうくわん}である久米朝臣広縄^{くめあそみひろなは}が天平二十年(748年)に朝集使となって上京し、国の行政の年次報告をして、役目を終えて天平感宝元年(749年)五月二十七日に帰国し、本務に服した。そこで、長官の館に詩酒の宴席を設けて酒を楽しんだときに国守の大伴家持が作った歌である」とある。



大君の 任^{まき}のまにまに 執^とり持ちて 仕ふる国の 年の内の

事かたね持ち ^{たまほこ}玉杵の 道に出で立ち 岩根踏み 山越え野行き 都へに
 参^まぬしわが背^せを あらたまの 年^ゆ往^{がへ}き還^{かへ}り 月重ね 見ぬ日さまねみ
 恋ふるそら 安くしあらねば ほととぎす 来^き鳴^{きつ}く五月^{さつき}の 菖蒲草^{あやめ}
 蓬^{よもぎ} 寝^{かづら}き 酒宴^{さかみづき} 遊び慰^なぐれど 射水川^{いみづがわ} 雪消^{ゆき}溢^げりて 逝^ゆく水の・・・
 (4116)

(天皇が命ぜられるままに役目に従ってお仕える国の 一年のことを取りまとめ携えて玉杵の道に出発し 岩を踏みしめ山野を超えて行って都に参上したあなたを あらたまの年も改まり 月を重ねて見ない日が多くなったので 恋しく思う身も安からずあったから ほととぎすが来て鳴く五月のショウブやヨモギを蔭に巻き酒宴を開いて遊び慰めたのだったが 射水川の雪解け水をみなぎらせて流れる水のように 一層恋しさが募り・・・) 今も、五月の節句にショウブ湯につかる習慣があるが、大伴家持は酒宴の席でショウブの冠にヨモギの葉を挿して頭に巻き付け、悪疫退散の呪^{まじな}いをしているのである(3.5.2.2項参照)。

ヨモギやオオヨモギの葉や茎葉を乾燥したものが生薬・艾葉^{がいよう}である。成分はクロロゲン酸などのタンニン類³⁹⁾、シネオール・ボルネオール・カンファーなどの精油、パルミチン酸・オレイン酸・リノール酸などの脂肪酸、そしてビタミン類である。腹部の冷え込みによる痛み・下痢による筋肉の痙攣・慢性下痢・吐血。鼻出血・下血・月経不順・不正子宮出血などに効能がある。漢方 294 処方では、芎^{きゅう}歸^き膠^{きょう} 艾湯^{いとう}(艾葉^{がいよう}＋地黄^{じきやう}＋芍薬^{しやくやく}＋当帰^{とうき}＋甘草^{かんそう}＋川芎^{せんじゆ}＋阿膠^{あきょう}：吐血・血尿・腹痛・月経痛・貧血に効く)のみに配合されている。

3.6.2 駆瘀血薬

3.6.2.1 駆瘀血薬としてのベニバナ

キク科の一年草で黄色の花をつけるベニバナの古名はクレナキ^{くれなゐ}(紅)。伸びた先の花を摘んだので雅称をスエツムハナ^{すえつむはな}(未摘花)ともいわれた。ベニバナの原産地は中近東であり、飛鳥時代にシルクロードを経て染色技術と栽培方法が伝わり、主に、化粧や染色のために栽培された。万葉集に二十七首採録されているベニバナは褪せ易い紅染めであること



から「はかない」の言葉を導くようだ。

外のみに見つ^{よそ}つ恋ひなむ^{くれなゐ} 紅^{うれつむはな}の末摘花の色に出ずとも (1993)

(外ながらにだけ見ては恋い慕っていよう 紅の末を摘まれてしまう花のように色〈表面〉には出なくても一恋は実らなくとも 見ているだけでいい。)

紅^{くれなゐ}の濃染^{こそめ}の衣色^{ころも}深く染^しみにしかばか忘れかねつる (2624)

(紅色に深く染めた衣のように 心に深くしみたからか あの人が忘れ難い。)

ベニバナの筒状花(花卉)をそのまままたは水溶性の黄色色素の大部分を除いて乾燥したものが色素(カータミン・サフロールイエロー)・リグナン・フラボノイド²⁴⁾・ステロール類³⁰⁾を含む生薬・紅花^{こうか}である。血小板凝集抑制や血管拡張の薬理があるので血行を促し、駆瘀血剤として婦人病特有の血行障害・生理痛や月経の閉止・産後の腹痛に効果がある。また、更年期障害のときにも用いる。漢方 294 処方では、葛根紅花湯(前述 3.1.1 項)・通導散(紅花+当帰+大黃+芒硝+枳実+その他：月経不順・更年期障害・便秘・高血圧による頭痛やめまいに効く)など 11 処方に配合される。

3.6.2.2 駆瘀血薬としてのモモ

モモはバラ科の落葉小高木で3月下旬から4月上旬に白桃色の花をつけ、7~8月に実がなる。

古事記の伊耶邦岐命^{いざなきのみこと}(イザナキ)と伊耶邦美命^{いざなみのみこと}(イザナミ)の黄泉の国の条にモモが登場する。イザナギとイザナミは多くの国々を産んだ後、



さらに多くの神々を産んだ。そして火の神、

火之夜芸速男神^{ひのやぎはやおののかみ}を産んだためイザナミは女陰を焼かれ、病に伏したのち神避り坐^{かむきま}しき。神様も死ぬのである。イザナキは神様として初めて寡男になってしまった。

イザナキはイザナミに会いたいと思い、黄泉の国に追っていったがそこで、見ないでくれといわれたのにイザナキが見てしまったものは蛆^{うじ}が集^{たか}ってコロコロ転がり^{うごめ}イザナミの姿であった。「よくも私に恥をかかせたわね」と言って、黄泉の国の醜女^{しこめ}に逃げるイザナキを追わせた。イザナキはひら坂(黄泉の国と葦原中つ国とを隔てる切り立った坂)に至ったとき、そこに成っていた桃の実を3個取って迎え撃ち撃退した。イザナキは桃の実に「お前は、私を助けたように葦

原中つ国に住む、すべての生ある人々が、苦しい目に遭って苦しみ悩む時には、助けよ」と仰せられ、意富加牟豆美命^{おほかむづみのみこと}という神の名を賜った。桃の実には魔除け・邪気を払う力があると信じられていたのであろう。ここから鬼退治する桃太郎の話もできた。

また、邪馬台国の有力候補とされる奈良県桜井市の纏向遺跡^{まきむく}から大量の桃の核が出土している。加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定から桃は西暦 135～230 年の間に摘まれたものであった⁴⁰⁾。祭祀で使われた後、捨てられたのであろうモモの核に含まれる薬効を卑弥呼は知らなかったのだろうか。

モモを織り込んだ歌は万葉集に六首あるが、天平勝宝二（750）年三月一日の暮^{ゆふへ}に春の苑の桃李の花を眺めて作った歌のモモの歌（スモモは前出 4140 番）。

春の苑^{そのくれなゐ} 紅にほふ桃^{したて}の花下照る道に出で立つ少女^{もとめ} (4139)

（春の苑に紅が照り映える 桃の花の輝く下の道に立ち現れる少女。）にほふは物の輝きだすさま。樹下美人図の図柄を歌にしたもので少女は幻影だろう。

桃の核の中に含まれる白いタネは青酸配糖体のアミグダリンを含む生薬・桃仁^{とうにん}である。瘀血を除き、血行を促進する・腸の津液を潤し・便通を滑らかにするなどの効能がある。駆瘀血作用として鎮痛緩下や月経不順などに用いる。漢方 294 処方では、桂枝茯苓丸^{けいしふくりょうがん}（桃仁＋桂枝＋茯苓＋芍薬＋牡丹皮：生理痛・月経不順・月経異常の改善）や大黃牡丹皮湯（桃仁＋大黃＋牡丹皮＋芒硝^{とうがし}＋冬瓜子^{とうかし}：便秘がちの人の月経不順や瘀血のある人の便秘や痔に効く）など 16 処方に配合される。

3.6.2.3 駆瘀血薬としてのエンレイソウ

ユリ科のエンレイソウの古名はツチハリ。多年草で湿った山地の林下に自生する。4～6 月に小さな紫紅色の花をつける。

わが屋前^{やど}に生ふう土針^{つちはり}心ゆも想はぬ人の
衣^{おも}に摺らゆな (1338)

（この我が家のツチハリよ 心から思いもしない人の衣に摺り染にされてはなりません。）ツチハリの葉は緑色の染料だが褪色し易い。「土針」は女の比喩で「心ゆも」は本気での意味。ここでは、移り気な男と付き合わないでねと言ったところ。



エンレイソウの茎・葉・花の全草を刈り取り乾燥したものが生薬・**益母草**^{やくもそう}である。アルカロイド（レオヌリン・スタキドリンなど）やフラボノイド（ルチン）を含み、子宮筋収縮力や血液凝固促進の効果があるので月経不順・不正子宮出血・瘀血による腹痛・血尿・化膿性のできものに用いる。ただし、サポニンなどの成分を含むため有毒植物であり過量に服用すると嘔吐・下痢などの中毒を起こす。漢方 294 処方では、**芎帰調血飲**^{きゅうきちやうけついでい}（**益母草**^{やくもそう}＋**白朮**＋**当帰**＋**地黄**＋**茯苓**＋その他：産後の体力低下・更年期障害・神経症などストレスを感じている女性が主対象）および**芎帰調血飲第一加減**^{きゅうきちやうけついでい}（**益母草**^{やくもそう}＋**紅花**＋**当帰**＋**大棗**＋**甘草**＋その他：月経、妊娠、出産、産後、更年期など女性の血の道症などに効く）の 2 処方へのみ配合される。

3.7 水薬

水薬は体内の水¹⁶⁾の代謝を図る作用をもつ薬物の総称である。体内に滞積した非生理的水分（胃などに溜まった体で使われない水分）はいろいろな形で身体に害を及ぼす。漢方では、非生理的な水分を状態によって水滯や湿という。

湿は体内に滞留する水分の最も希薄なものをいい、主に胃腸に作用し、泥状便でしぼり腹、残便感、ガスが腸内に対流して腹脹および食欲不振などの症状を呈する。水薬は症状により、水滯を除く利水薬、去湿に加えて胃腸機能を調える去湿健胃薬（**藿香**^{かくこう}・**草豆蔻**^{そうずく}など）、鎮咳去痰薬がある。万葉集には去湿健胃薬を処方する生薬の基原（原料）となる植物を織り込んだ歌は見当たらない。

3.7.1 利水薬

利水薬は体内に蓄積した非生理的水分（水滯）を利尿によって除く薬物のことであり、浮腫・水腫・関節水腫・胃内停水などの病症を治療する。**蒼朮**^{そうじゆつ}・**木通**^{もくつう}・**猪苓**^{ちよれい}・**茯苓**^{ふくりやう}などの生薬がある。

3.7.1.1 利水薬としてのオケラ

キク科の多年草で山野に自生するオケラの古名はウケラ。京都の八坂神社ではオケラ詣りという行事があり、大晦日から元旦にかけて、社前でオケラの根を入れて篝火を焚く。参詣人はその火を縄に移して振りながら持ち帰り、仏壇や神棚

の灯明に点じ、元旦の雑煮をつくるときの火種にして一年の無病息災を祈る。オケラは厄除けの植物である。オケラは目立たず変わらない姿で咲く花として東歌に採録されている。



恋しけは袖も振らむを武蔵野の

うけらが花の色に出なゆめ (3376)

(恋に苦しくなったら袖を振ろうものを 武蔵野のうけらの花のように 人目に立つ素振りをなさるな。) オケラは秋に白色から薄紅色の頭花が開き、周囲にトゲ状の総苞を具える。

わが背子を何どこも言はむ武蔵野のうけらが花の時無きものを (3379)

(わが背子をどう表現したらよいのか〈心中を表現する言葉を知らない〉武蔵野のうけらの花のようにいつもいつも恋しいものを。) 女が心中で恋人に呼び掛けている。「時無きものを」はオケラの花が咲いている期間が長いので何時と時を定めずに「常に」の意である。

オケラ(日本薬局方では中国産のホソバオケラ)の根茎そのまま乾燥したものが生薬・蒼朮である。オケラの根茎の外皮を除いたものを生薬・白朮と呼ぶ。蒼朮はβ-ユーデスマール・ヒネソール・アトラクチロジンなどを含み、気味辛烈である。発汗作用があつて、熱を下げ、胃内停水を除く作用があるので食欲不振・嘔吐・水様性下痢・流行性感冒に用いられる。一方、白朮は僅かに辛く苦い。白朮中に含まれるアトラクチロンが臭覚を刺激して反射的に胃液の分泌を盛んにするといわれる。白朮の薬効は蒼朮と共通する部分が多く食欲不振・疲労倦怠・腹部膨張感・下痢止め・胃もたれ・利尿促進などに使う。漢方 294 処方では、白朮あるいは蒼朮は、加味逍遙散(蒼朮+柴胡+芍薬+生姜+薄荷+その他:精神神経症・冷え性・月経不順・更年期障害)や芍薬六君子湯(蒼朮+人參+茯苓+半夏+陳皮+甘草+その他:胃炎・胃腸虚弱・消化不良・食欲不振・胃痛などに効く。)など 62 処方に配合される。ここに、蒼朮・人參・茯苓・半夏・陳皮・甘草の 6 種の生薬を君子に見立て六君子湯と名付けたという。

3.7.1.2 利水薬としてのアケビ

アケビはつる性落葉低木で春に淡紫色の花をつけ、9～10 月に熟した淡紫色の

果実になる。アケビの古名はツヅラ。アケビは秋の味覚であり、果実・果皮・新芽を食材としてきた。また、蔓を使って籠も編める。

駿河の海磯^{おしへ}に生^おふる浜つづら

汝^{いまし}をたのみ母^{たが}に違ひぬ (3359)

(駿河の海岸の磯に生える浜つづらのように 末永くとあなたを信頼して母の心に背きました。) 母は娘の恋の監視役として登場している。

アケビの木質化した蔓^{つる}(茎)を乾燥したのが生薬・木通^{もくつう}であり、ヘデラゲニン・アレアノール酸を含み、抗炎症・利尿作用があるので腎臓に働き、膀胱炎や浮腫に用いられる。漢方 294 処方では、当帰四逆湯(木通+当帰+桂皮+細辛+その他:冷え性・下腹部痛・下痢・月経痛に効く)など8処方に配合される。



3.7.2 鎮咳去痰薬

鎮咳去痰薬は胃腸系に水分が停留したとき、咳や痰の形で現れた状態を治療改善する薬である。桔梗^{ききよう}・杏仁^{きやうにん}・厚朴^{こうぼく}・五味子^{ごみし}・桑白皮^{そうはくひ}などの生薬がある。

3.7.2.1 鎮咳去痰薬としてのキキョウ

キキョウ(桔梗)はキキョウ科の多年生草本植物で山上憶良が秋の七草を詠んだ歌(1538)に登場する秋の七草のひとつ朝顔^{あさがほ}のことで、開花時期は6月中旬~9月である。今のアサガオは平安時代に中国から渡来したとされる。



朝顔^{あさがほ}は朝露^{あさつゆ}負ひて咲くといへど夕影^{ゆふかげ}に

こそ咲きまさりけり (2104)

(キキョウの花は朝露に濡れて咲くというけれど夕方の光の中にこそ一層美しく咲くことだ。) 夕影の「影」は光のこと。人生、若く輝いているときもよいけれど、経験を積んで情趣・余情のある初老の方にこそ人間味があるということか、それとも単に幽玄の世界を詠っているのだろうか。

キキョウの根を乾燥したものが生薬・桔梗根で、サポニンを多く含むことから

去痰・鎮咳・鎮痛・鎮静・解熱作用がある。漢方 294 処方では、^{じゅうみはいどくとう}十味敗毒湯（桔梗＋柴胡＋川芎＋甘草＋その他：化膿しているおでき・皮膚炎・湿疹などに効く）や^{さいきょうはんげとう}柴梗半夏湯（桔梗＋半夏＋柴胡＋生姜＋その他：感冒・肺炎・気管支炎など粘性の痰に効く）など 31 処方に配合される。

3.7.2.2 鎮咳去痰薬としてのホオノキ

葉が大きく 20 cm 以上もあるモクレン科の落葉高木のホオノキの古名はホホガシハ。その葉は食べ物を包むために用いていたので、万葉集では黄白色で香気の強い 9 弁の花を詠むのではなく葉を詠んでいる。天平勝宝二年（750 年）四月、越中守大伴家持の屋敷の宴に僧恵行が同



席した。その時、二人が詠んだ「^{よほがしは}攀ち折れる保宝葉を見たる歌二首」と題する歌がある。家持がホオノキを引き寄せて折り、捧げ持つ。まず、僧恵行が詠う。

わが背^せ子^こが捧^もげて持てるほほがしはあたかも似るか青き^{きぬがき}蓋^{がさ}（4204）

（わが君が捧げ持っているホオノキはさながら似ているよ青い衣笠に。）わが君は大伴家持のこと。ホオノキはさかさ卵型の大きな有柄の葉をもつので衣笠を連想したのである。衣笠は長い柄をもった絹張の傘で貴人に付き従う従者が後ろからかざした蓋のことで家持を賛美している。青色の蓋は最高位である一位の者のみが見えるが、家持は従五位であったので蓋の使用が許される身分ではなかった。恵行は家持を一位に見立てて持ち上げたのである。それに和えて家持は

皇神祖^{すめろき}の遠御代^{とほみよ}御代^{みよ}はい布^ふき折^しり酒飲^きみきといふそこのほほがしは（4205）

（皇祖たちの遠い御代御代には 広げて畳んで酒を飲んだということよ このホオガシワは。）皇祖は天皇の祖先。ホオノキの葉は古くから食べ物器あるいは筒状にして酒器としていた。代々の天皇が御酒の具とされていた貴いものに例えられては畏れ多いと気恥ずかしく思っ返した歌である。

ホオノキの樹皮や根皮を乾燥したものが生薬・厚朴であり、ピネン・カンフェンなどの精油、ホオノキオール・マグノクラリン・マグノフロリンなどのアルカロイドが含まれている。健胃・鎮痛・鎮痙・抗潰瘍・鎮咳・去痰などに効果がある。厚朴は漢方 294 処方では、^{はんげこうぼくとう}半夏厚朴湯（厚朴＋半夏＋茯苓^{そよう}＋蘇陽^{しやうやう}＋生^{せい}姜^{きやう}）

不安神経症・不安感など気分が塞いで喉に異物がへばりつくような違和感のある場合に使用する)や胃苓散(厚朴+蒼朮+猪苓+桂皮+甘草+その他:食あたり・急性胃炎・冷え腹などの効く)など29処方に配合される。ちなみに、ホオノキは材質が柔らかいので版木・マッチ棒・鉛筆材・下駄の歯に用いられる。

3.7.2.3 鎮咳去痰薬としてのサネカズラ

サネカズラの古名はサナカヅラ。モクレン科の常緑つる性植物で、夏から初秋にかけて黄白色の小さな花が咲き、晩秋に美しい赤紫色の大きな実(さね)をつける。作者未詳の歌がある。

あしひきの山さな^{かづら}葛もみつまで

妹に逢^{いも}わずやわが恋^こひ居^ゐらむ (2296)

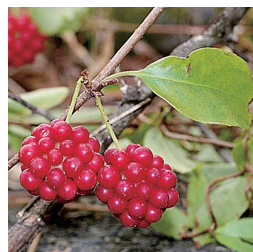
(あしひきの山のサネカヅラが赤くなるまで 私は

妻に逢わずに恋うているのだろうか。)「もみつ」は紅葉を指すがサネカズラは常緑なので、この場合、熟して山の霜で赤く色づいた実のこと。大きな赤い実は燃えるような恋を連想させる。柿本人麻呂はサネカズラを後に「逢おう」あるいは「必ず逢おう」との意味の枕詞に使っている。

さね^{かづら}葛のちも逢^{いも}はむと夢^{ゆめ}のみに祈^う誓^けひわたりて年は経^へにつつ (2479)

(さね葛の〈蔓が長く伸びて先端が絡み合う〉ように後にも逢おうと 夢の中ばかりで誓約をしつつ 年を過ごしているよ。)「祈誓」は定めたルールに従って吉凶を判断する占い。

サネカズラの枝や葉を細かく切って水につけておくと粘質物を出す。これを整髪料に用いたので美男^{びなん}葛^{かづら}ともいった。この粘液は製紙用にも用いる。実を天日乾燥したものが生薬・南五味子^{なんごみし}であり、滋養強壮、疲労回復などに用いる。チョウセンゴミシの果実から得られる生薬は北五味子^{ほくごみし}という。五味子は粘液質のほか、クエン酸・リンゴ酸・酒石酸などの有機酸、シトラール・リグナン(シザンドリン・ゴミシン)・セスキテルペン(イランゲン)などの精油を含む。中枢神経系の興奮作用・鎮咳・去痰・利尿・消炎・胃液分泌抑制・血圧降下作用などがある。漢方294処方では、加味四物湯(五味子+当帰+芍薬+蒼朮+その他:滋養強壮・鎮痛・消炎に効く)や味麦地黄丸^{みばくじおうがん}(五味子+地黄+麦門冬+山薬+その他:息切



れ・腰痛・排尿困難・頻尿・むくみに効く）など 16 処方に配合される。

3.7.2.4 鎮咳去痰薬としてのクワ

クワ科の落葉高木で養蚕のために刈り取るので長大なものは少ない。古代の人はクワの葉を食べて輝く絹を作り出す蚕を神秘的な生き物と考えていた。養蚕は古くからおこなわれており、奈良時代は調として絹糸の徴収のため朝廷が桑を植えることを奨励していた。



足^{たらち}乳^ちねの母がそれ養^かふ桑^{くはこ}すら願^{きぬ}へば衣^けに着^きすといふものを (1357)
 (たらちねの母が大切に養っている蚕でさえ願えば衣にして着せてくれるというものを。) 私の恋は実らないと娘は嘆いている。「養^かふ」は朝廷に貢^{たてまつ}る調に当てる養蚕のことで生業ではない。

筑波^{つくは}嶺^ねの新桑^{にいぐわまよ}繭^{きぬ}の衣はあれど君^{みけし}が御衣^{みけし}しあやに着^き欲^ほしも (3350)
 (筑波山に新しく萌え出た桑の葉で飼った蚕の その糸で織った衣もよいけれども あなたのお着物こそ 着とうございます。)」あれど」のまえにヨクハが入る。男性の衣を頂くことは愛を受ける意である。

冬に根を掘り乾燥したものが生薬・桑白皮^{そうはくひ}であり、プレニルフラボン誘導体(モルシン・クワノン)・トリテルペノイドなどを含む。鎮痛作用・抗炎症作用・血圧降下・利尿作用・血糖降下・血圧降下作用・解熱・鎮咳などの効果がある。漢方 294 処方では、杏蘇散^{きょうそうさん}(桑白皮^{そうはくひ}＋蘇葉^{そよう}＋杏仁＋烏梅＋その他：慢性気管支炎・鎮咳去痰・肺の炎症に効く) など 6 処方に配合される。

3.8 駆虫薬

駆虫薬は、体内に寄生する回虫やギョウ虫などの寄生虫を排泄するために用いる薬物である。

3.8.1 駆虫薬としてのセンダン

落葉高木のセンダンは 5、6 月頃、淡紫色の五弁の花をつけ、果実は 10～12 月に黄褐色に熟す。古名はアフチ。妻を亡くした大伴旅人の気持ちになって山上

憶良が詠んだ歌。

妹^{いも}が見し^{あふち}棟の花は散りぬべしわが泣く涙^ひいまだ干^ひなくに (798)

(妻の見た柂^{せんたん}の木は落花の気配を見せる 悲しみのわが涙もまだ乾かないのに。)「散りぬべし」は花が散りそうでまだ散っていない状態を指し、散れば、思い出の縁^{よすが}を失う。

センダンまたはトウセンダンの実を乾燥したものを生薬・川^{せんれんし}楝子または苦楝子という。脂肪酸・タンニン・スコポリン・スコポレチンを含み、整腸・鎮痛剤・虫下し・条^{じょうちゅう}虫駆除に用いる。漢方 294 処方では、椒^{しょうばいとう}梅湯(川^{せんれんし}楝子+烏梅+山椒+桂皮+その他：回虫に対する駆虫剤)にのみ処方される。



4. その他の生薬となる万葉集に詠まれた植物

この項では、厚生労働省通知「一般用漢方製剤承認基準の改正について」で規定された漢方 294 処方には採用されていない生薬の基原(原料)となる植物を織り込んだ万葉歌を取り上げる。

4.1 アカネ

アカネは山野に自生するつる性の多年草で、初秋、黄色味を帯びた白く小さな花をつける。万葉の時代、日の出の頃の空を「あかねさす」と形容し、紫・月・日・照る・君などにかかる枕詞とするがアカネそのものを詠った歌はない。天武天皇と鸕野讃良皇女(後の持統天皇)の子で天武天皇の後継者とみなされた草壁皇子が早逝したことを悼み、柿本人麻呂が詠んだ長歌の反歌の一つ。



あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠^{かく}らく惜しも (169)

(茜色を帯びて日輪は今日も輝いているのだが太陽にも似た皇子は夜空を渡る月のように隠れてしまったことは惜しいよ。)「日」は持統天皇を指し、「月」は草壁皇子を暗喩している。あかねさす日とぬばたまの夜の月を対比させて、悲し

みを強調している。

紅色の染料にも用いられてきたアカネの根や茎を乾燥したものが生薬・茜草根^{せいそうこん}で、オキシアントラキノンのブルブリン・ムンジスキンを含む。利尿や血液凝固作用があることから、吐血・鼻血・血便などの時の止血の他、腎臓病や生理不順に薬効がある。また、消炎作用があるので鎮咳去痰剤としても用いる。

4.2 アカメガシワ

トウダイグサ科の落葉高木。新芽が鮮紅色で、初夏、枝先に小さな白色の花をつけるアカメガシワの古名はヒサギ。どこにでも生えている食用にも薬用にもなる有用樹である。山部赤人はヒサギを詠っている。



ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる
清き川原に千鳥しば鳴く (925)

(ぬばたまの夜が更け果てると、ヒサギの生える清らかな川原に 千鳥がしきりに鳴くことよ。) 歌の前半は暗で、後半は明になっている。

樹皮は主要成分としてベルゲニン・ルチン・タンニンなどを含む生薬・野梧桐^{やごとう}で民間薬として胃潰瘍・十二指腸潰瘍・胃炎などの胃疾病に煎用する。葉は生薬・野梧桐葉^{やごとうよう}で神経痛などの痛み止めに用いる。これらは日本薬局方に記載の生薬である。

4.3 オキナグサ

キンボウゲ科の多年草オキナグサの古名はネツコグサ。花は紫がかった深紅色で釣り鐘型であり、うつむき加減に咲く姿は可憐な女性を思わせるが、花の後には花柱が白い羽毛状に変わるのて白髪老人に見立ててオキナグサと名付けたという。ネツコグサを詠んだ歌は一首のみである。



しばつき み う ら きき あれ
芝付の御宇良崎なるねつこ草あひ見ずあらば吾恋ひめやも (3508)

(芝付の御宇良崎に群生するオキナグサが根つくように共寝した もし寝ることもなかったらこんなに恋しくはないものを。) 御宇良崎は神奈川県三浦岬。

オキナグサは有毒成分(プロトアネモニンやラナンクリンなど)を含むのでその汁液に触れると皮膚炎をおこすが、漢方においては、根を乾燥したものが生薬・白頭翁^{はくとうおう}といい、止血、下痢止めに用いる。

4.4 カナムグラ

カナムグラの古名はムグラ。道端や荒れ地に生えるつる性一年草。カナムグラのカナは下向きにトゲのある茎が針金でできているように強靱なため金物のカナが付いたという。ムグラとは蔦で絡んで密生した状態のことでカナムグラは生命力の強い雑草である。



聖武太上天皇が左大臣橘諸兄の邸宅に行幸したとき、諸兄が詠んだ歌

律^{むぐら}はふ賤^{いや}しき屋戸^{やど}も大君^{おほきみ}の坐^まさむと知らば玉敷^{たまふ}かましを (4270)

(カナムグラのはびこる賤しい我が家でも 上皇様がお越しになると知っていたら玉を敷きましたものを。) 天平勝宝二年(750年)に宿禰から朝臣賜姓された橘諸兄が自分の邸宅を謙遜して詠っている。玉(天皇)を中心に臣下がカナムグラのように周囲にひれ伏した状態をイメージしたのであろう。

カナムグラの地上部を刈り取り乾燥したものが生薬・律草^{りつそう}である。精油・フラボノイド・シュウ酸・タンニンなどを含み健胃・利尿・解熱薬として用いる。

4.5 ケイトウ

ヒユ科の一年草で花穂の頂が鶏の赤いトサカ状のケイトウ(鶏頭)の古名はカラアイ。韓藍^{からあい}は熱帯アジア原産で韓(中国)を經由して渡来した染料の藍^{あい}の意である。「カラ」の明るい音の響きから外国の文化への憧れや珍しさを感じた万葉人の山部赤人がカラアイを詠んでいる。



わが屋戸^{やど}に韓藍^{からあい}蒔^まき生^{おほ}し枯れぬれど懲^こりずてまたも蒔^まかむと思ふ (384)

(私の家にケイトウの花を蒔いて育て 枯れてしまったけれども また蒔こうと思う。) 万葉人に珍重された観賞用の園芸植物を詠っている。あの恋は終わってしまったが、また懲りずに新しい恋をしようとの寓意がある。

夏の時期、花が咲き誇っているときに採取して乾燥したものが生薬・^{けいこん}鶏冠^か花で止血・下痢止めなどに薬効がある。

4.6 コノテガシワ

コノテガシワは現在のどの花にあたるのか定説はないがここではヒノキ科のコノテガシワ (児手柏) とする。葉はヒノキに似て鱗片状、扁平で表裏の区別がなく、子どもの^{てのひら}掌のように見える。

コノテガシワを詠った歌には、「^{ねじけびと}倭人を^{そし}誘われる歌一首」として、博士^{せなのぎやうもん}消奈行文太夫の作がある。^{ねじけびと}倭人は^{せなのぎやうもん}へつらう人。消奈行文は新羅の人で養老年間の大学寮の教員 (博士) である。太夫は四・五位の人をいう。



奈良山の^{このてがしは}児手柏^{ふたおも}の両面にかにもかくにも^{ねじけびと}倭人の徒^{とも} (3836)

(奈良山のコノテガシワが両面であるように ああもいひ こうもいひ ^{ねじけびと}倭人のやからよ。) 奈良山は平城京の北の丘陵。風が吹くと幼子の手のひらのようなコノテガシワの扁平な葉が裏を表をとあっち向いたりこっち向いたりするようにあっちにもこっちにもいひ顔をするおべっか^{ねじ}使いの掬けたやつ。

種子を乾燥したものが生薬・^{はくしにん}柏子仁で脂肪油 (常温で液体の油脂) を含み、鎮静・強壮に効能がある。また、ピネン・タンニン・フラボノールなどを含むコノテガシワの葉を生薬・^{まくはくよう}側柏葉といい、止血剤・リウマチ・神経痛などに用いる。

4.7 セリ

セリは湿地や水田に群生する多年草で春の七草の一つ。カリウム・カルシウム・鉄などのミネラル類、カロテン、ビタミンC・ビタミンK・ナイヤシン・葉酸などのビタミン類も豊富である。

葛城王 (前述の橘諸兄) が任地から芹を贈った。その薬包みに歌を添えている。

「天平元年 (729 年) に班田せし時の使^{かつらぎのおほきみ}葛城王^{やましろのくに}の山背国より^{せちめうくわんのみようぶ}薛妙観命婦等

の所に贈れる歌一首 芹子の裏に副へたり」

あかねさす昼は田賜^たびてぬばたまの夜^{いとま}の暇^{せり}に摘める芹子これ (4455)

(あかねさす昼は班田使として田を与えて

ぬばたまの夜 公務の暇に あなたののために

摘んだセリですよ これは。) この年、班田収

授法によって大々的に口分田^{わかつ}を班ち与え、税収

の確保にあたった。苦勞してセリ手に入れた理

由を述べた戯れ歌である。



葛城王の歌に薛妙観命婦^{かえ}が報し贈った歌。

大夫^{ますらを}と思へるものを太刀佩^{たち}きてかにはの田居^{たゐ}に芹子そ摘みける (4456)

(あなたは勇ましい立派な男子だと思っておりましたのに 太刀を帯びてかにはの田んぼでセリを摘んでいらしたのですか。) セリを摘むのに相応しくない服装

を言っているようだ。「かには」は山城国の地名(京都府木津川市)。セリは塩

漬けや茹でて醬^{ひしおす}酢をつけて食されていたと考えられる。室町時代^{むろぎ}、根芹には強精作用があると信じられ、次の二句が詠まれているのが面白い³⁷⁾。

根芹見て摘む手を恥じる女かな

物洗ふ女の恥づる根芹かな

薛妙観命婦もセリに強精作用があることを知っていて返歌したのだろうか。

セリの茎葉を天日乾燥したものはカロテン・ナイアシン・ビタミン類を含む生

薬・水芹^{すいせん}であり、口臭・食欲増進・解熱・神経痛・リウマチなどに薬効を示す。

また、浴湯料^{よくとうりょう}にする。

4.8 チガヤ

チガヤの古名はツバナ。イネ科の多年生草本でチガヤ

の若い花穂はチバナまたはツバナと呼ばれかすかな甘み

があり食べられる。茎葉は屋根を葺くのに用いた。穂を

乾燥させて、火打石で火を起こすときの火口^{ほくち}にもした万

葉時代の生活の必需品である。年老いた紀郎女^{きのいらつめ}が若い大

伴家持に贈った歌がある。



戯奴^{わげ}がためわが手もすまに春の野に抜ける茅花^{つばな}そ食^まして肥えませ（1460）
 （あなたのために私の手も休めず春の野で抜いたツバナですよ 召し上がって
 おたみなさいな。）「戯奴」は若者の意。

チガヤの根茎を陰干しにしたものが生薬・茅根^{ぼうこん}で、果糖・ブドウ糖・蔗糖・トリテルペン（シリンドリン）を含み、消炎・利尿・止血・発汗の薬効がある。数種の薬を調合した方剤には茅根湯や茅葛湯などがあり、水腫・黄疸・腎炎・急性肝炎に用いる。また、チガヤの花穂を生薬・白茅花^{びやくぼうか}といい、鼻出血や歯茎からの出血に用いる。

4.9 ツユクサ

ツユクサの古名はツキクサ。ツユクサは6～9月の朝咲いてその日の午後には萎んでしまう。万葉時代には、すでにツユクサの花汁は染料として摺染に用いた。現在も染めた布を水に浸すと簡単に色が抜けるので友禅染の下絵を描く時の絵具に用いられる。ツユクサは色が水で落ちやすいので心変わりを例えたり、世のはかなさを表すのに詠み込まれる。



朝咲^{あした}き夕^{ゆう}は消ぬ^け鴨頭草^{つぎくさ}の消ぬべき恋もわれはするかも（2291）
 （朝に咲いて夕方にはしぼんでしまうツキクサのように 身も心も消えてしま
 いそうな恋も私はするのでしょう。）

ツユクサの茎葉を天日乾燥したものを生薬・鴨跖草^{おうせきそう}という。フラボノイドやアントシアニン系色素を含み湿疹・あせも・風邪・熱性下痢・水腫などに用いる。

4.10 ナデシコ

ナデシコ科の多年草で秋の七草のひとつ。花の先は細かく切れ込んでおり、淡紅色あるいは白色である。女性から好かれるタイプの男であった大伴家持は多くの女性と恋の駆け引きをしている。歌人の笠女郎^{かさのいらつめ}が大伴家持に贈った歌でナデシコを織り込んだ相聞歌がある。愛人であった笠郎女



が大伴家持に捨てられる前

の歌か捨てられてから後の歌かはわからないが、女は男を素直に愛している。

朝ごとにわが見る^{やど}屋戸の^{なでしこ}瞿麦が花にも君はありこせぬかも

(1616)

(毎朝 見る我が家のナデシコの花でもあなたは逢ってくれないかなあ。)

あなたが、毎朝、私が見る庭のナデシコの花であって下さればいいのに。

ナデシコの開花時に地上部の全草を乾燥したものが生薬・^{くばくし}瞿麦であり、秋に種子を取って乾燥したものが生薬・^{くばくし}瞿麦子である。少量のアルカロイドとサポニンを含み、^{くばくし}瞿麦は利尿作用があり、^{くばくし}瞿麦子も排尿困難・むくみに効く。

4.11 ニワウメ

ニワウメの古名はハネズ。果実は生食する。バラ科サクラ属の落葉低木。初夏に紅花をつけ、染色に用いられるが褪せ易い。移ろい易い恋の比喻に用いている。白色を帯びた紅色である^{はねずいろ}朱夏色は親王以上の皇族の色とされ、現在も皇太子の服色となっている。ハネズを詠んだ大伴坂上郎女の歌がある。



思わじと言ひてしものを^{はねずいろ}朱夏色の^{うつろ}変ひやすきわが心かも

(657)

(恋などすまいと言っていたものを ハネズ色のように変わり易いわが心よ。また恋しくなった。) 彼女の甥の大伴家持の歌もある。

夏まけて咲きたる^{はねず}唐棣ひさかたの雨うち降ればうつろひなむか

(1485)

(夏を待ち受けてやっと咲いたハネズだのにこう久方の雨が降ると色褪せてしまうのだろうか。雨よ降るな。)

秋に熟した実を採取して、果肉と殻を取り、中の種子を乾燥したものが生薬・^{いくりにん}郁李仁である。青酸配糖体のアミグダリンやサポニン・フィトステロール・ビタミン B₁ などを含み、利尿・便秘に効果がある。

4.12 ニワトコ

ニワトコ(接骨木)の古名はヤマタヅ。スイカズラ科の落葉低木である。葉は

対生で羽状の複葉は長さ 15～30cm になり、新芽が出る春に白色の小さな花を付け、赤い球状の核果になる。題詞に「古事記に曰く

かるのひつぎのみこ かるのおほいらつめ たは かるれ
 軽 太 子、軽 太 郎 女 に 奸 く、故、その太子を
 伊予の湯に流す。この時、衣 通 王、恋慕に
 堪へずして追ひ往く時の歌に曰く」とある。允

恭天皇の皇太子であった軽皇子が同母妹である軽太郎女（衣通姫）と姦通をしたので、太子は伊予に流され、軽太郎女が後を追ったのである。

君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを往かむ待つには待たじ (90)

（あなたがお出かけになってから日数も長くなったニワトコのように迎えに行こうか待つにはもう待つまい。）ニワトコは、葉が対生することから、鳥の羽のように向かい合っている。これが両腕を挙げて人を迎える姿に似ていることから迎えの枕詞となった。

ニワトコの生薬として用いる部位は3か所ある。茎を生薬・接骨木、葉と若い枝を生薬・接骨木葉、根を接骨木根という。タンニンや有機酸塩などを含む。一般には、民間薬として単味で鎮痛薬・消炎薬・止血薬・利尿薬として打撲・痛風・咽喉痛・便秘・むくみなどに用いる。



4.13 ヒカゲノカズラ

ヒカゲノカズラは常緑多年生のシダ植物で古名はヒカゲあるいはヤマカズラカゲ。春に茎のところから土筆に似た穂を出して孢子嚢を付け、その中から石松子という孢子を出す。石松子は湿気を防ぐため丸葉の衣に用いる。ヒカゲノカズラの緑色に輝く不変の生命力は神聖なものとされ、大



嘗祭や新嘗祭には冠の髷（髪をかき上げるのに用いるもの）の左右に垂らす。ヒカゲノカズラは得難いもの、すなわち高貴な女性の譬えにも用いる。

あしひきの山葛 かげましばにも得がたきかげを置きや枯らさむ (3573)

（あしひきの山に生えるヒカゲノカズラのように そうそうは得難い〈美女〉をそのまま枯らしてしまうのか。）「山葛かげ」がヒカゲノカズラで美女の譬喩。

次の大伴家持の歌は、「京^{みやこ}に向かはむ時に、貴人^{うまひと}を見、及^{また}美人^{かほよきひと}に相ひて、飲^あ宴^{うた}せむ日の為に、懷^{おもひ}を述べて儲^もけて作れる歌二首」の一首である。

見^ほまく欲^ほり思^{おも}ひしなへに 纏^{かづら}懸^かけかぐはし君^{きみ}を相^あ見^みつるかも (4120)

(お逢いしたいと思っていた通りに纏^{かづら}をまいた素晴らしいあなたにお逢いできましたことよ。) 越中国守であった大伴家持は都に国内の政治全般の報告と戸籍台帳を太政官に報告のために上京していた。この歌は題詞にあるように天平感宝元年(749年)五月二十八日、貴人(左大臣橘諸兄か)がヒカゲノカズラの冠を付けて天皇臨席の朝礼に出席し、その後、酒席が催されることを想定して、またその席に美女が侍ることも念頭において作っておいた歌であろう。

全草にはアルカロイドやテルペン類が含まれ、乾燥したものは生薬・伸筋草^{しんきんそう}(石松ともいう)で名前の通り、打撲傷や捻挫に効く。関節痛や神経痛、リウマチなどの疼痛性疾患に利用される。またヒカゲノカズラの胞子は石松子と呼び、湿気を吸収しないので、球状薬剤の丸衣に利用する。

4.14 ヒガンバナ

ヒガンバナの古名はイチシ。9~10月、特に秋の彼岸の頃に茎を出し頂端に赤色の花を多数つけるので天上に咲く花という意味の曼珠沙華ともいう有毒の多年草。ヒガンバナは万葉集に柿本人麻呂の一首だけに登場する。



路^{みち}の辺^へに老^い師^しの花^{はな}のいちしろく人皆知^{ひとみなしる}

りぬ我^{われ}が恋^{こひづま}妻^まを (2480)

(路のほとりのヒガンバナの花のようにはっきりと人は知ってしまったようだ。わたしの恋しい妻を。) 「いちしろく」は万葉仮名で「灼然」と書き鮮烈な感情を表す。極めてはっきりと二人の仲がバレてしまったことを喜んでいる。

ヒガンバナは鱗茎にアルカロイド(リコリン、ガランタミン、セキサニンなど)を含むので誤食すると嘔吐・下痢・流涎・神経麻痺などが起こる。鱗茎をすり潰したものが生薬・石蒜^{せきさん}である。石蒜には去痰・利尿・解毒・催吐などの効果があるが、民間療法として催吐の目的で内服させる他は、外用として鱗茎をすりおろ

したもので肩こりや乳腺炎、乳房痛などの湿布薬とする。ちなみに、アルカロイドのガラントミンはアルツハイマー病や記憶障害の治療薬として用いられる。

4.15 ヒルガオ

つる性の多年草で自生するヒルガオの古名はカホバナ（容花）。7～8月頃に野原や道端に生える。アサガオに似た小型で淡紅色の花は、昼間は開いて夕方には萎む。大伴家持が妻坂上大嬢に贈った長歌に続く短歌にヒルガオが詠われている。



高^{たか}円^{まど}の野^の辺^への容^{かほ}花^{ばな}面^{おも}影^{かげ}に見^いえつ^つ妹^{いも}は忘^われか^かね^ねつ^も (1630)

（高円の野辺のヒルガオのように 面影ばかり見え続けて あなたを忘れることはできないよ。）大伴家持は聖武天皇の行幸にお供をしており、伊勢から山城への途中で奈良市の高円山の麓に住む妻に贈った歌である。

ヒルガオはケンフェロール配糖体やサポニン含み、全草を乾燥して裁断したものが生薬・^{せん}旋^か花である。神経痛・糖尿病・高血圧予防に効果ある。神経痛には浴湯料とする。

4.16 ヒジバカマ

キク科の多年草で秋の初めに淡紫色の小さな花をつける。中国原産で日本へは薬草として持ち込まれたものが野生化した。近年は、生息環境の減少から絶滅危惧種Ⅱ類となっている。ヒジバカマの古名はフヂバカマ。ヒジバカマを詠み込んだ歌は3.1.1項で掲げた山上憶良の「秋の野の花



を詠める」旋頭歌二首の内の一（1538）のみである。旋頭歌は五七七五七七を基本とする歌。養老四年（720年）の秋に筑紫国守であった山上憶良が子どもたちに教えるために七種を織り込んで作った歌といわれる。

生のヒジバカマには香りはないが、収穫後、半濁きにするとオクマリニン配糖体が加水分解によって芳香性のクマリンに変化し芳香を放つので香草として知

られる。開花期に茎葉を乾燥したものが生薬・^{らんそう}蘭草である。利尿・通経・黄疸・腎炎などで体に浮腫^{むく}みがある場合に用いる。

4.17 ヤブコウジ

ヤブコウジの古名はヤマタチバナ。ヤブコウジは夏に数個の花を咲かせ、秋から初春にかけて赤い実をつける。ここに、いづれも赤い実を付けるヤブタチバナはマンリョウ、クササンゴはセンリョウ、カラタチバナはヒャクリョウ、そしてヤマタチバナはジュウリョウと呼ばれる。大伴家持がジュウリョウのヤブコウジを詠っている。題詞がある。「冬十一月五日の夜



に、少し^{なるかみ}雷^{なりかみ}起こり、雪降りて庭を覆へり。忽^{たちま}ちに感憐^{かなしび}を懷^{むだ}きて、聊^{いささ}かに作れる短歌一首」

消^け残りの雪にあへ照るあしひきの山^{やまたちばな}橘^{つと}を裏^{うら}に摘み来な (4471)

(消え残る雪と照り映えあっている あしひきのヤブコウジを土産に摘んで来たいよ。) 白い雪とヤブコウジの赤い実のコントラストが見事である。「裏」は包んだものでちょっとしたプレゼント。妻への土産であろう。聖武上皇天皇が崩御した天平勝宝八年(756年)のことである。

ヤブコウジの根茎と根を乾燥したものを生薬・^{し きんぎゅう}紫金牛^{しきんぎゅう}という。成分にベンゾキノン誘導体のラパノン、ベルゲノンなどを含み、解毒、利尿剤、咳止めに用いる。全草は慢性気管支炎に用いる。

5. おわりに

万葉集に採録された歌の約 1/3 にあたる 1500 首余りに植物が詠み込まれており、その植物の多くは、生薬のほか食糧・衣料・染料などとして用いられた。万葉人は、草花や木を見ては春夏秋冬それぞれの季節を喜び、恋を語り、恋人を想い、長寿を願い、故人を偲ぶのである。苔にまで心を寄せている。

み吉野の青根^{たけ}が峰^{こけむしろたれ}の羅^{たてめき}蓆^{たてめき}誰か織りけむ経緯無しに (1120)

(み吉野の青根の山の蓆^{むしろ}のような苔はだれが織ったのであろう。経糸も緯糸もないのに。) この苔はサルオガセと考えられ、乾燥したものは生薬・^{しやうら}松羅^{しやうら}といい、

利尿・去痰薬として用いる。

万葉集に詠まれた生薬として有用な植物を取り上げ、個々の草根木皮に含まれる医薬成分と薬効、そして漢方処方について述べたが、詠み人はその植物について特には生薬としての捉え方はしていない。

生薬は単独（単味）で用いることもあるが、多くは数種の生薬を配合した処方薬、即ち漢方薬として使われる。漢方薬についての系統的な知識は5世紀頃、朝鮮半島を経て日本に伝来している。漢方薬は大きく2つに分類され、

- 1) 幻覚・精神高揚・催淫などの中枢興奮作用のある生薬を処方した漢方薬。
- 2) 鎮静（鎮痛）・解熱・下剤・下痢止め・催吐などの中枢抑制によって苦痛を除去する作用がある生薬を配合した漢方薬である。

前者は病気治療以外に呪術を職能とするものが用いたであろうが、後者の中枢抑制の機作をもつ生薬は現在も処方されている。

植物の成分からなる生薬は葉・茎・根・樹皮などから有効成分を単離することなく用いられてきたが、17世紀に入ると科学技術の発展に伴って植物の蒸留エキスなど生薬を精製加工するようになる。有効成分が単離・精製され始めたのは19世紀になってからである。1806年にアヘンから鎮痛薬モルヒネが、1820年にキナノキの樹皮からマラリアの特効薬キニーネが抽出された。1887年には、長井長義が麻黄から喘息薬の有効成分エフェドリンを抽出している。高峰譲吉は、1894年にコウジ菌から消化酵素タカジアスターゼ、1900年にウシの副腎から交感神経興奮薬・止血剤のアドレナリンの抽出に成功している。

ヒガンバナに含まれるアルカロイドのガランタミンは1951年からアルツハイマー病や記憶障害の治療薬としての使用が始まった。中華料理に欠かせない香辛料である八角はトウシキミの果実を乾燥したもので生薬・^{だいりゅうきょう}大茴香であり、健胃・腹痛に効果がある。1996年には、この八角から得られるシキミ酸の誘導体を化学反応させて合成したものが抗インフルエンザ薬のタミフル（商品名）である。

長寿・健康は人類の願いであって19世紀以降、現在まで、数限りない医薬が経験や類似の病気に対する薬剤情報に基づいて製薬されてきた。その創薬の手法は今でももちろん有効であり、生薬に含まれる未知の生理活性物質から新薬が開発される期待も大きい。しかし、現在はゲノム創薬⁴¹⁾が薬の開発手法の主流となりつつある。さらに、iPS細胞⁴²⁾（人工多能性幹細胞）を使った創薬が試みら

れている。

6. 文献と注記

- 1) 御影雅之、木村正幸編『伝統医薬学・生薬学』南江堂（増補版 2013 年）。
- 2) 吉川雅之編『生薬学・天然物化学』化学同人（2008）（第 2 版 2012 年）。
- 3) 関水康彰『薬のルーツ"生薬": 科学的だった薬草の効能』技術評論社（2010）。
- 4) 山口佳紀、神野志隆光校注・訳 新編日本古典文学全集(1)『古事記』小学（1997）。
- 5) 中西進『万葉集 全訳注原文付』、1～3 巻、四季社（2008）。
- 6) 杉山一男『万葉時代のグリーンケミストリーへの序：万葉時代の政治的・文化的背景』近畿大学工学部紀要人文・社会科学篇第 45 巻 109-145（2015）。
- 7) 佐竹元吉『薬草の科学』日刊工業新聞社（2013）。
- 8) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳 新編日本古典文学全集(2)～(4)『日本書紀』1～3 巻 小学館（1994-1998）。
- 9) 鳥越泰義『正倉院薬物の世界：日本の薬の源流を探る』平凡社（2005）。
- 10) 井上光貞、関晃、土田直鎮、青木和夫校注 日本思想大系(3)『律令』岩波書店（1976）。
- 11) 平尾真智子『光明皇后の施薬院・悲田院と施浴伝説：看護史の視点からの考察』日本医史学雑誌 第 57 巻 3 号 371-372（2011）。
- 12) 杉山二郎『大仏以後』学生社（1986）。
- 13) アルカロイドは天然由来の窒素を含む有機化合物の総称。エフェドリン（交感神経興奮剤）・ガラントミン（アルツハイマー病治療薬）・モルヒネ・ヘロイン・コデイン（麻酔性鎮痛や陶酔の作用）・アトロピン（副交感神経の抑制作用）・コカイン（覚せい剤・麻酔薬）・ニコチン（猛毒・神経などを刺激・麻酔性）・キニーネ（解熱・抗マラリア）・セトロニン・ドーパミン（神経伝達物質）・ヒスタミン（血管拡張作用）・カフェイン（中枢神経興奮作用：強心・利尿・興奮）・アドレナリン（副腎の髄質ホルモンで心筋の血管の拡張、皮膚・粘膜の血管を収縮して血圧上昇作用）・アコニチン（トリカブトの猛毒）コルヒチン（痛風の特効薬）などが知られている。

- 14) 杉山一男「万葉時代のグリーンケミストリー4 奈良大仏の造立と重金属公害について（仮題）」近畿大学工学部、紀要に投稿予定。
- 15) 植垣節也校注・訳 新編日本古典文学全集(5)『風土記』小学館（1997）。
- 16) 水^{すい}という概念は身体の水分代謝が滞って排出が困難になり身体に過剰の水分が存在する状態をいう。余分な水分を除く作用のある薬物を水剤または利水剤という。また、津液は人体の正常な体液成分の総称で体表を潤して体温の調節に関与し汗・尿となって体外に排泄される水や唾液・胃液・涙なども含まれる。津液過剰の場合は水滯（水毒）といい、津液の代謝に関わる脾・肺・腎に機能障害があるときに起こる。脾の障害のときは胃に水が溜まり、下痢を引き起こす。肺の場合は浮腫を起こし、腎の場合は排尿異常や浮腫を起こす。ひどい水滯の場合は動悸・息切れを起こす。
- 17) 根本幸夫監修『漢方 294 処方生薬解説：その基礎から運用まで』じほう（2016）。
- 18) 服部保、南山典子、小川康彦『万葉集の植生学的研究』植生学会誌、27 巻、45-61（2010）。
- 19) 広島大学附属福山中・高等学校編著『万葉植物物語』中国新聞（2002）。
- 20) 東京生薬協会編『新常用和漢薬集』南江堂（1978）。
- 21) 貝津好孝著、菅原光二写真『日本の薬草』小学館（1995）。
- 22) 村上清尚『漢方革命：生薬の配合の妙』たにぐち書店（2002）。
- 23) 村上清尚『漢方革命Ⅱ：生薬の配合の妙・表証から裏へ』たにぐち書店（2004）。
- 24) 生薬成分としてのイソフラボノイドには葛根に含まれるダイゼイン・ダイジン・プエラリン・ゲニステイン・ホルモノネチンや甘草に含まれるリコイソフラボン A などがある。
- 25) サポニンとはサポゲニンと糖からなる配糖体の総称。界面活性作用があるため、赤血球を破壊（溶血）するものもある。トリテルペノイドサポニンはサポニン化合物に分類されるトリテルペン類（文献²⁹⁾ 参照）である。
- 26) 植物から得られる芳香性・揮発性のある油の総称でテレピン油・樟脳油・薄荷油・丁子油などでテルペン系化合物や芳香族化合物を含み、香料・医薬用・宗教儀式用として用いる。

- 27) 薬獵は日本書紀の推古天皇 19 年にも記載がある。「十九年の夏五月の五日に、
^{うだのの}菟田野に薬獵す。」本来、鹿の若角（生薬・^{しかじょう}鹿茸：補精強壯剤）を取る獵。
後に薬草を取ることをも言う。
- 28) 朱捷『においとひびき：日本と中国の美意識をたずねて』白水社（2001）。
- 29) 精油中に含まれる 2 個以上のイソブレンを含む有機化合物で、2 個のイソブレン単位からなるモノテルペンにはリモネン・ピネン・カンフェン・ボルネオールなどがあり、3 個のイソブレン単位から構成されるセスキテルペンには生姜の油に含まれるジギベレンなどがあり、6 個のイソブレン単位から構成されるトリテルペンにはスクアレンなどがある。
- 30) コレステロールなどステロイド核という構造をもつ有機化合物の総称。
- 31) ^{おけつ}瘀血は血の巡りが悪くなっている状態を指す。肩こり・頭痛・冷えのぼせ・顔や皮膚に艶がなくどす黒い、他更年期障害に見られる諸症状を呈する。
- 32) 心身のバランスが取れた状態を漢方では中庸といい、自分自身に合った中庸の状態を保つことが必要である。寒の状態である冷えたり、体力・体質が不足すると体全体のバランスが崩れて体調不良や病気を引き起こすので体を温めて温の状態にして不足を補うことを温補という。
- 33) グリコシドともいわれ、糖が種々の原子団と結合した化合物でステロイド配糖体、アントシアニン配糖体、青酸配糖体、サポニン配糖体などが知られる。
- 34) 多夢は睡眠中によく夢を見ること。嫌な夢や現実的な夢は体の不調と関係があると考える。思い悩みやケガ・病気・月経血過多などが精神活動に異常をきたすことで睡眠に影響が出る。他にも眠りが浅い・動悸・息切れ・疲れやすい・イライラ・健忘・軟便の症状を伴うことがある。
- 35) 遺精は性行為を伴わない不随意の射精のこと。夜寝ているうちに射精してしまうことを夢精という。
- 36) 女性生殖器からの分泌物で血液以外のものをいい、通常、不快感を起こす程度に増量したものをいう。
- 37) 廣野卓『食の万葉集：古代の食生活を科学する』中央公論社（1998）。
- 38) カルボン酸とアミンが脱水縮合してできる化合物の総称。
- 39) ポリフェノールの一種で茶葉に含まれるタンニンはエピカテキン・エピガラカテキンである。

- 40) 中村俊夫『纏向遺跡出土のモモの核の AMS ^{14}C 年代測定』、纏向学研究センター研究紀要「纏向学研究」、第 6 号、65-73 (2018 年)。
- 41) 通常、薬は、病気の原因となるタンパク質に作用し、その機能をコントロールすることで薬効を示す。ゲノムは DNA のすべての遺伝情報のこと。ゲノム情報を活用して、病気の原因となる遺伝子を同定し、その遺伝子を作るタンパク質の構造や機能を知り、その情報をもとに医薬をデザインすることをゲノム創薬という。患者自身のゲノムを利用して製薬するため、患者の体質や病気の特徴にあった治療ができるオーダーメイド医療で副作用が少なく高い効果が期待できる。
- 42) iPS 細胞(induced pluripotent stem cell)は皮膚などに分化した細胞に特定の遺伝子を組み込み、あらゆる生体組織に成長しうる能力をもった細胞にする、即ち、多能性をもった状態に初期化した細胞(幹細胞)である。例えば、遺伝的要因の可能性のある ALS (筋萎縮性側索硬化症)、パーキンソン病、あるいはアルツハイマー病など神経変性疾患の治療薬の創薬研究がある。

要約

天然に存在する薬効をもつ草根木皮などから有効成分を抽出することなく用いる薬の総称を生薬という。古来、我が国においても独自の生薬があったと考えられるが、生薬を含む医薬に関する中国の最新の知識は、5 世紀頃、朝鮮半島を経て伝来した。生薬は単独で用いることもあるが、多くはいくつかの生薬を配合した処方薬—漢方薬として使われる。一方、万葉集に採録された 4516 首の歌の約 1/3 にあたる 1500 首余りに植物が詠み込まれており、その植物の多くは、生薬のほか食糧・衣料・染料などとして用いられた。本報では、万葉人が植物にもつイメージや捉え方から、彼らの自然観や生活様式を味わうとともに、古代の医薬の在り方を概観した。即ち、万葉集の中から生薬として有用な植物を織り込んだ歌を取り上げ、個々の草根木皮に含まれる医薬成分と薬効、そして漢方処方について検討した。